

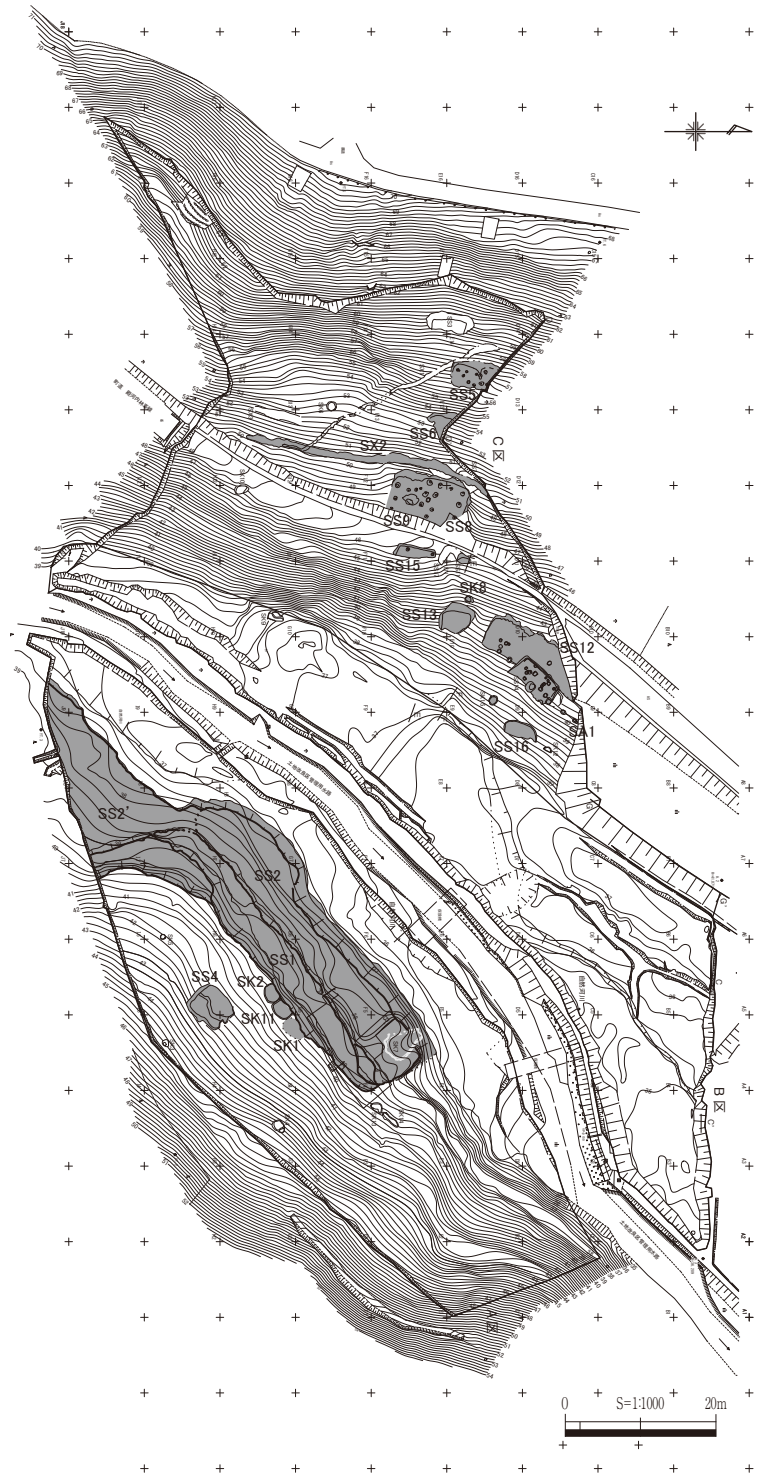
第5節 古代の調査成果

1 概要(第41図)

飛鳥時代から古代では、主に斜面部に多数の遺構、遺物を検出した。検出した遺構は、飛鳥時代の段状遺構12基(SS5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16)、柵列2基(SA1・2)、奈良時代の段状遺構3基(SS1・2・4)、土坑1基(SK8)、平安時代の土坑・製炭土坑4基(SK1・2・11・15)、道と考えられる溝1基(SX2)である。

飛鳥時代の遺構は主に西側斜面部(C区)に、奈良時代から平安時代の遺構は主に東側斜面部(A区)にみられる。

その他、古墳時代終末期の須恵器を中心とした遺物が、谷部(B区)の造成土中から多数出土した。この中には、溶着・変形したものや窯壁片と考えられる溶着した焼成粘土塊が含まれており、須恵器窯に関連する遺物と考えられるものがある。調査地内では、この時期の須恵器窯は検出されておらず、本来調査地内にあった須恵器窯が圃場整備に伴う工事で破壊された可能性もあるが、調査地外の北西斜面上方に窯体が存在する可能性もある。



第41図 古代遺構配置図

2 段状遺構・掘立柱建物跡

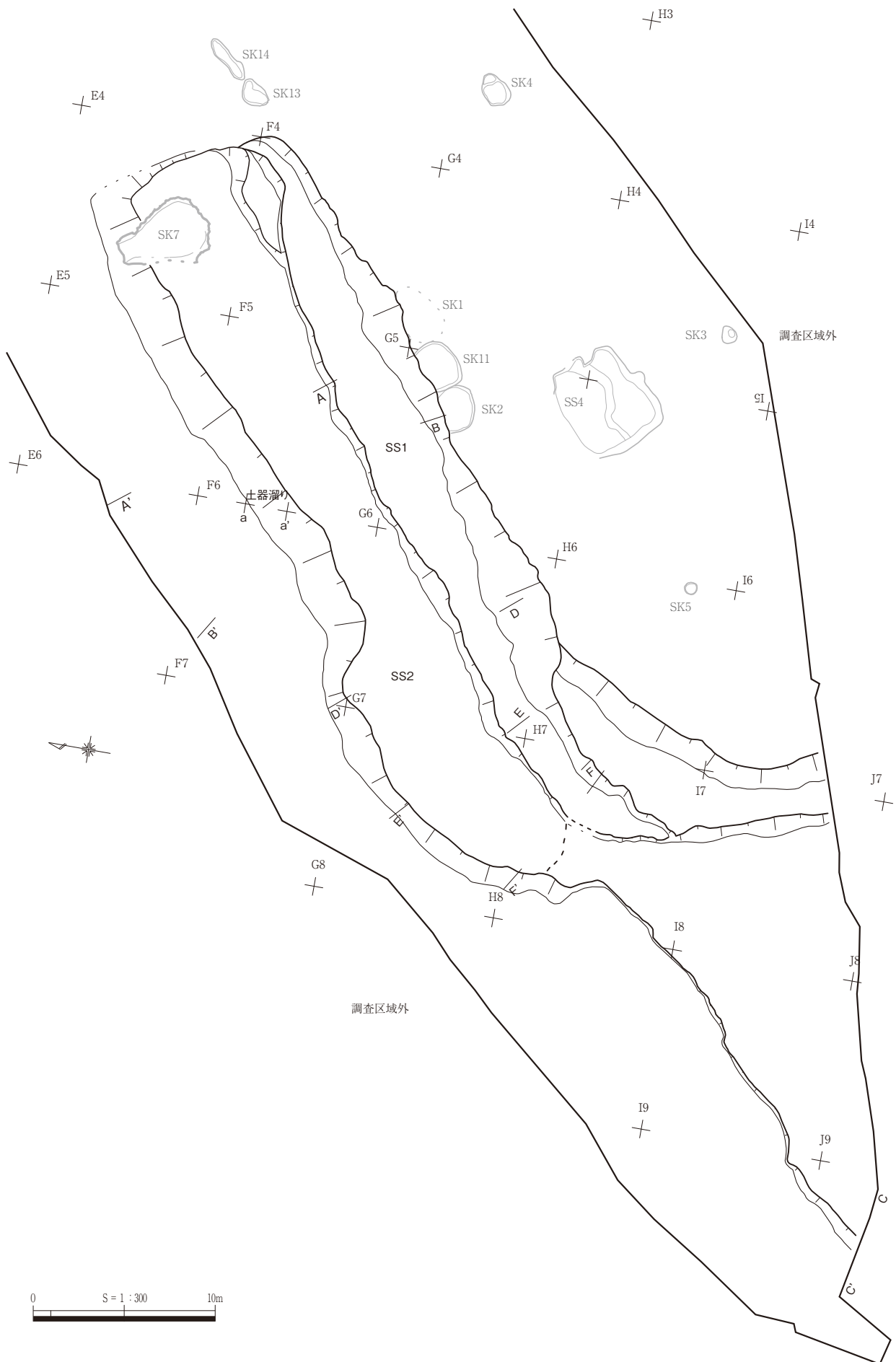
SS 1 (第42~44図、PL. 7・32・33)

A区中央南側のI 6・7、H 5・6、G 4・5グリッドにあり、標高38.7~40.0mの斜面に立地する。西側はSS2と接するが、切り合い関係は不明である。

黄褐色ロームや御来屋礫層を最大0.7m掘り込んで、長さ44m、幅2.0~4.8mの平坦面を造り出している。本来は、さらに南側に延びていたと考えられるが、流失している。平坦面には建物等の施設は確認されなかった。

埋土は、褐色土である。

出土遺物は、埋土中から出土した須恵器坏蓋8~10を図化した。いずれも、かえりが消失し端部が

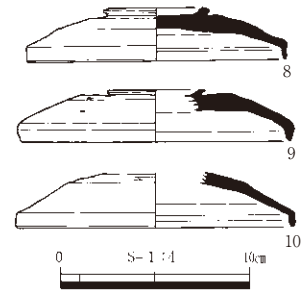


第42図 SS1・2

第3章 調査成果

折れ曲がるもので、輪状つまみが付けられるものと考えられる。

出土遺物から、八峠編年奈良初期、奈良時代初頭のものと考えられる。



SS2 (第42・44～47図、PL. 7～10・32・33)

A区中央部のE4・5、F4～6、G6・7、H7、I7・8、J8グリッドにあり、標高36.7～38.8mの東斜面中腹に立地する。

長さ71m以上、幅3.7～5.8mに亘って、主に盛土によって大規模な平坦面が形成されている。E4グリッドで遺構の北東端となり、急角度で斜面部が形成される。また、G7グリッドで平坦面が凸状に飛び出す形状となる。遺跡はさらに南側調査区外へ延びており、途中のI8グリッド周辺は流失している。平坦面の標高は北東側が38.5m前後、南西側が38.4m前後で、ほぼ水平となっている。平坦面上には、建物等の施設は確認されなかった。

第43図 SS1 出土遺物

大規模な盛土が確認でき、A-A'断面では3・19・21層が盛土、4・5・20層が旧表土に相当するものと考えられる。盛土の厚さは最大0.4mを測る。旧表土以下は基盤層となる。15～18層は10～20cmの厚さでほぼ水平に堆積しており、造成土と考えられ、SS2と一連で盛土された可能性がある。12～14層は、平安時代後期以降堆積し始める、後述する自然河川(NR1)の堆積層で、15～18層を切るように堆積している。

B-B'断面では、33・37層が盛土、30・38層が旧表土に相当すると考えられる。盛土の厚さは、最大0.24mを測る。29層以下は基盤層である。23・24層は土器溜りを形成する層で、30層に覆われる。土器溜りからは、奈良時代の遺物が出土しており、土器溜りと盛土の間には、ある程度の時間差があったと考えられる。よって、SS2は、古代の遺構と判断するが、土器溜りよりやや時期が下る可能性がある。4～14層は、自然河川(NR1)の堆積層である。

C-C'断面では、1～7層が表土、8～14・19層が盛土の可能性がある。22～24層は基盤層である。盛土の厚さは、最大0.74mを測る。

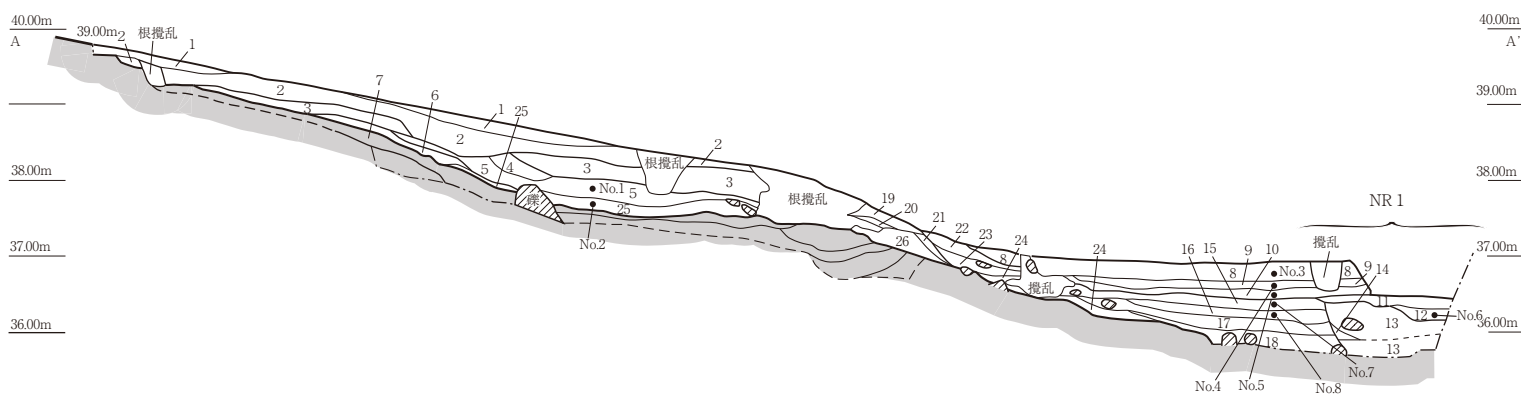
D-D'断面では、1・2層が盛土、3層が旧表土に相当すると考えられる。盛土の厚さは、最大0.3mを測る。以下は基盤層である。

E-E'断面では、1層が盛土、2層が旧表土に相当すると考えられる。盛土の厚さは、最大0.2mを測る。以下は基盤層である。

F-F'断面では、1層が盛土の可能性がある。旧表土に相当する層は確認されておらず、当遺構の南側は、基盤層を成形した後に盛土が行われた可能性がある。盛土の厚さは、最大0.08mを測る。

なお、土壌分析の結果では、A-A'断面の8・9・10層、C-C'断面の3・4・7・8層ではクマザサ属等のタケ亜科の花粉・植物珪酸体が優占する他、湧水部や低湿地などに生育する木本・草本類の花粉が検出されており、自然河川NR1堆積後は明るく開けた草原となっていたものと考えられている。その他、河川堆積土中ではイネ属、ソバ属も検出されており、遺跡周辺ではイネやソバの栽培が行われていた可能性が指摘されている(第4章第1節)。

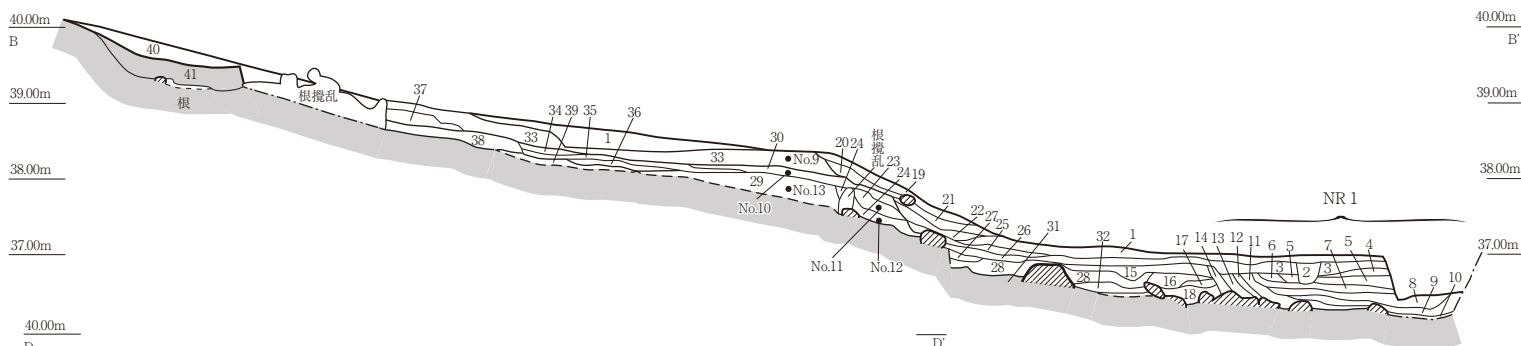
中央部分のF6・G6グリッドを中心に、埋土や盛土中から遺物が出土している。図化したものは、土師器甕11～14、土師器移動式竈片15・16、須恵器坏蓋17、須恵器坏18、高台坏19・20、高坏21、壺22、薄板状不明鉄製品①である。



A-A'

- 1 暗褐色土 (10YR2/2) 腐植土。表土。
- 2 褐色土 (10YR4/4) φ1～10mm 大の礫粒が10%混じる。流土。
- 3 褐色土 (7.5YR3/3) 地山土ブロックと旧表土(4層)の混じり。盛土。
- 4 暗褐色土 (10YR2/2) φ1～10mm 大の礫粒が10%混じる。旧表土。
- 5 暗褐色土 (10YR3/2) φ1～10mm 大の礫粒が5%混じる。旧表土。
- 6 褐色土 (10YR4/4) 7層の二次堆積あるいは土壌化が進んだものか。旧表土。
- 7 褐色土 (10YR4/5) 6層よりも明るい。固く締まり、割るとシャリシャリとする。
- 8 暗褐色土 (10YR3/3)
- 9 におい黄褐色土 (10YR4/3)
- 10 灰黄色砂質シルト (2.5Y 4/1) φ1～10mm 大の礫粒を10%含む。
- 11 暗褐色砂質シルト (2.5Y 3/1)
- 12 暗褐色砂質シルト (2.5Y 3/2)
- 13 暗灰黄色粗砂 (2.5Y 4/2) φ1～20cm 大の円礫・亜円礫を80%含む。

- 14 暗灰黄色粗砂 (2.5Y 4/2)
- 15 暗灰黄色砂質シルト (2.5Y 4/2) φ5mm 大の炭片を1%含む。
- 16 灰黄色シルト (2.5Y 4/1) φ5～10mm 大の礫粒を15%含む。
- 17 灰色シルト (5Y 4/1) φ5～20mm 大の礫を20%含む。
- 18 オリブ黒色砂質シルト (5Y 3/1) φ5～20cm 大の円礫を20%含む。
- 19 におい黄褐色土 (10YR 4/3)
- 20 暗褐色土 (10YR 3/3) 地山の浅黄色砂質シルトブロックを10%含む。
- 21 におい黄褐色土 (10YR 4/3) φ2～3cm 大の亜円礫が20%混じる。19層との同時異層
- 22 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
- 23 黒色シルト (10YR 3/2)
- 24 におい黄褐色砂質シルト (10YR 5/3) φ2～3cm 大の円礫・亜円礫が40%混じる。
- 25 黒色粘質シルト φ5mm 大の礫粒と2～5cm 大の亜角礫を20%含む。
- 26 におい黄褐色砂質シルト (10YR 4/3) φ1～5cm 大の亜角礫を20%含む。固く締まる。



B-B'

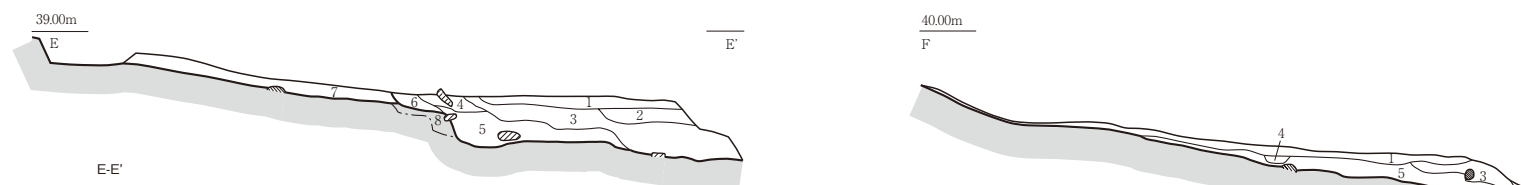
- 1 暗褐色土 (2.5Y 3/2～10YR 2/2) 腐植土。
- 2 暗オリブ褐色土 (2.5 Y3/3)
- 3 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
- 4 暗オリブ褐色砂質シルト (2.5Y 3/3) 粗砂が混じる。
- 5 暗灰黄色シルト (2.5Y 4/2)
- 6 暗黄褐色シルト (10YR 4/2) φ5～20mm 大の礫が5%混じる。
- 7 暗灰黄色砂質シルト (2.5Y 4/2)
- 8 暗灰黄色シルト (2.5Y 4/2) φ5～30mm 大の亜円礫を20%混じる。
- 9 暗褐色シルト (2.5Y 3/2)
- 10 暗灰黄色砂質シルト (2.5Y 4/2) φ10～30mm 大の亜円礫を10%含む。
- 11 暗灰黄色シルト (2.5Y 4/2) φ10～50mm 大の亜円礫を30%含む。
- 12 暗オリブ褐色シルト (2.5Y 3/3) φ1～3cm 大の礫(破砕)を5%含む。
- 13 暗灰黄色シルト (2.5Y 4/2) φ3～5cm 大の亜角礫を5%含む。
- 14 φ3～5cm 大の亜円礫。オリブ褐色シルト (2.5Y4/3) が10%の隙間を満たす。
- 15 におい黄褐色粘質土 (10YR 5/4) 28層と同質。φ1～3cm 大の礫を含む。
- 16 暗褐色砂質シルト (10YR 3/3) φ5mm 大の礫粒を5%含む。
- 17 暗褐色シルト (10YR 3/3) φ3～5cm 大の亜円礫を含む。
- 18 砂礫混じりににおい黄褐色砂礫混じりシルト (10YR 4/3) φ5～30mm 大の礫を40%含む。
- 19 暗褐色土 (10YR 3/2) 旧表土。
- 20 暗褐色土 (10YR 3/3) φ5～20mm 大の亜角礫を5%含む。
- 21 におい黄褐色土 (10YR 4/3)

- 22 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 21層よりも暗い。
- 23 灰黄褐色土 (10YR 4/2) 固く締まる。
- 24 におい黄褐色シルト (10YR 5/3) 29層のブロックが40%混じる。遺物包含層(土器溜り)
- 25 灰黄褐色シルト (10YR 4/2) φ5mm 大の礫粒、φ2～5cm 大の亜角礫を10%含む。
- 26 灰黄褐色シルト (10YR 4/2) φ5mm 大の礫粒、φ2～10cm 大の亜角礫を30%含む。炭粒が混じる。
- 27 灰黄褐色シルト (10YR 5/2) φ5cm 大の円礫を20%含む。固く締まる。
- 28 黒色シルト (10YR 2/1) φ5mm 大の礫粒を10%含む。固く締まる。
- 29 明黄褐色土 (10YR6/6) φ3～5cm 大の亜角礫を5%含む。ローム由来か。
- 30 暗褐色土 (10YR 3/2) φ2cm 大の礫、φ5mm 大の礫粒を5%含む。下層が土壌化したものか。
- 31 砂混じり黄灰色シルト (2.5Y4/1) φ2cm 大の礫を5%含む。
- 32 砂混じり暗灰黄色シルト (2.5Y5/2) φ1～3cm 大の亜角礫を10%含む。
- 33 褐色土 (10YR 4/4) φ1～10mm 大の礫粒が10%混じる。
- 34 暗褐色土 (10YR 3/4)
- 35 暗褐色土 (10YR 3/4) (16)層よりも暗い。
- 36 におい黄褐色土 (10YR 4/3) (20)層よりも暗い。φ5～10mm 大の礫粒を5%含む。
- 37 黄褐色土 (10YR 5/7)
- 38 暗褐色土 (10YR 3/3)
- 39 におい黄褐色土 (10YR 4/3) φ3～5cm 大の亜円礫を含む。固く締まる。地山相当
- 40 褐色土 (10YR 4/4)
- 41 黄褐色岩盤 (2.5Y 5/4) 御米屋礫層、基盤層。



D-D'

- 1 暗褐色土 (10YR3/3) 褐色土 (10YR4/6) の団粒を40%含む。盛土。
- 2 におい黄褐色土 (10YR4/3) 褐色土 (10YR4/6) の団粒を10%含む。盛土。
- 3 暗褐色土 (10YR3/2) φ1～5mm 大の礫粒とφ1～5cm 大の角礫を5%含む。旧表土
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) φ1～5mm 大の礫粒を5%含む。
- 5 におい黄褐色粘質土 (10YR5/3) φ5mm 大の礫粒とφ1cm 大の礫を5%含む。ローム由来か。
- 6 黒色土 (10YR2/1) φ5mm 大の礫粒とφ1cm 大の礫を10%含む。

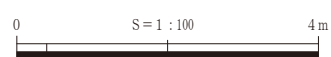


E-E'

- 1 におい黄褐色土 (10YR4/3) におい黄褐色土 (10YR5/4) の団粒を40%含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/2) φ1～3cm 大の亜角礫を5%含む。旧表土。
- 3 におい黄褐色粘質土 (10YR5/4) φ1～5cm 大の亜角礫を5%含む。ローム由来か。
- 4 におい黄褐色土 (10YR4/3)
- 5 暗褐色土 (10YR3/1) φ5mm 大の礫粒を10%、下部にφ10cm 大の亜角礫を20%含む。
- 6 褐色砂質土 (10YR4/4) φ5cm 大の亜角礫を40%含む。
- 7 におい黄褐色砂質シルト (10YR6/4) 固く締まる。
- 8 砂礫が凝結した岩盤 (御米屋礫層)

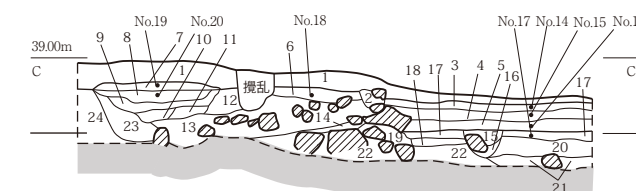
F-F'

- 1 褐色土 (10YR4/6) φ1～5cm 大の亜角礫を5%含む。ローム由来か。
- 2 暗褐色土 (10YR3/4) φ5cm 大の亜円礫が下層に集中する。
- 3 褐色土 (10YR4/4) ローム由来か。
- 4 暗褐色土 (7.5YR5/6) ローム由来か。
- 5 暗オリブ褐色砂質シルト (2.5Y3/3) φ5mm 大の礫粒を30%、φ5～10cm 大の角礫を10%含む。固く締まる。



※NO.の付いた層は、自然科分析試料に該当 (第4章第1節)

C-C'



- 1 暗褐色重粘土 (10YR 3/3) φ5cm 以下の礫、粗砂、細砂を多く含む。粘性やや強、締まりやや弱。
- 2 暗褐色砂壤土 (7.5YR 3/4) φ20～30cm 大の礫が混じる。粘性弱、締まり弱。
- 3 暗褐色重粘土 (10YR 3/4) φ1cm 以下の礫、粗砂、φ1mm 以下の地山ローム粒を多く含む。粘性やや強締まりやや強。
- 4 暗褐色シルト質壤土 (10YR 2/3) φ1～2cm の礫を少量、粗砂を多く含む。粘性やや弱、しまりやや弱。
- 5 におい黄褐色シルト質壤土 (10YR 4/3) φ1～3cm の礫、粗砂を少量含む。粘性やや強、しまりやや強。
- 6 褐色砂質土 (10YR 4/4) φ1～5cm の礫を密に含む。粘性やや弱、しまりやや弱。
- 7 褐色重粘土 (10YR 4/4) 粗砂、φ2～10mm の礫をやや密に含む。粘性強、締まり強。
- 8 におい黄褐色砂質土 (10YR 4/3) 粗砂を多く、φ1～2cm の礫を少量含む。粘性やや強、締まりやや弱。
- 9 暗褐色砂質土 (10YR 3/3) 粗砂、φ5～10cm の礫 (河床礫) を多く含む。粘性やや強、締まり強。
- 10 褐色壤土 (7.5YR 4/3) 粗砂を多く、φ1～5cm の河床礫をやや密に含む。粘性やや弱、締まり強。
- 11 褐色砂壤土 (7.5YR 4/3) 粗砂、φ2～30mm 大の礫を密に含む。鉄分沈着。粘性弱、締まり強。
- 12 暗褐色壤土 (7.5YR 3/4) 粗砂、φ2～50mm 大の礫をやや密に含む。粘性やや弱、締まり強。
- 13 におい黄褐色砂土 (10YR 4/3) 粗砂、細砂を密に含む。φ1cm 大～20cm 大の大小の河床礫を密に含む。東端付近で鉄分沈着。粘性弱、締まりなし。
- 14 褐色シルト質壤土 (7.5YR4/4) φ5～50mm 大の礫を密に含む。粘性弱、締まりなし。
- 15 暗褐色シルト質壤土 (10YR 3/3) 細砂、粗砂を多く含む。φ5～30mm 大の礫を少量含む。粘性弱、締まり弱。
- 16 暗褐色砂質土 (10YR 3/2) 粗砂をやや密に含む。粘性弱、締まり弱。
- 17 暗褐色砂質土 (10YR 3/2) φ2～30mm 大の礫を多く含む。粘性やや強、締まりやや弱。
- 18 灰黄褐色シルト質壤土 (10YR 4/2) 粗砂、φ2～5mm 大の礫を多く含む。φ2～10cm の河床礫を少量含む。粘性やや強、締まりやや強。
- 19 暗褐色シルト質壤土 (10YR 3/4) φ5～10cm の礫をやや密に含む。粘性弱、締まり弱。
- 20 におい黄褐色砂土 (10YR 5/4) φ2mm 程度の礫を密に含む。φ1～10cm の礫を多く含む。鉄滓を含む。古代 (奈良時代) の須恵器・土師器を含む。粘性強、締まりなし。
- 21 灰黄褐色砂土 (10YR 4/2) φ2～5mm 大の礫を密に含む。φ3～4cm 大の礫を少量含む。粘性なし、締まり弱。
- 22 灰黄褐色シルト質壤土 (10YR 4/2) φ2～5mm 大の礫を多く含む。φ3～4cm 大の礫を少量含む。粘性弱、締まり弱。
- 23 におい黄褐色シルト質壤土 (10YR 5/3) 粗砂、φ2～5mm 大の礫をやや密に含む。φ1～5cm 大の礫を少量含む。粘性やや強、締まりやや弱。
- 24 におい黄褐色シルト質壤土 (10YR 5/3) 粗砂、φ2～5mm 大の礫をやや密に含む。φ1～5cm 大の礫を多く含む。粘性やや強、締まり強。

第44図 SS1・2土層断面



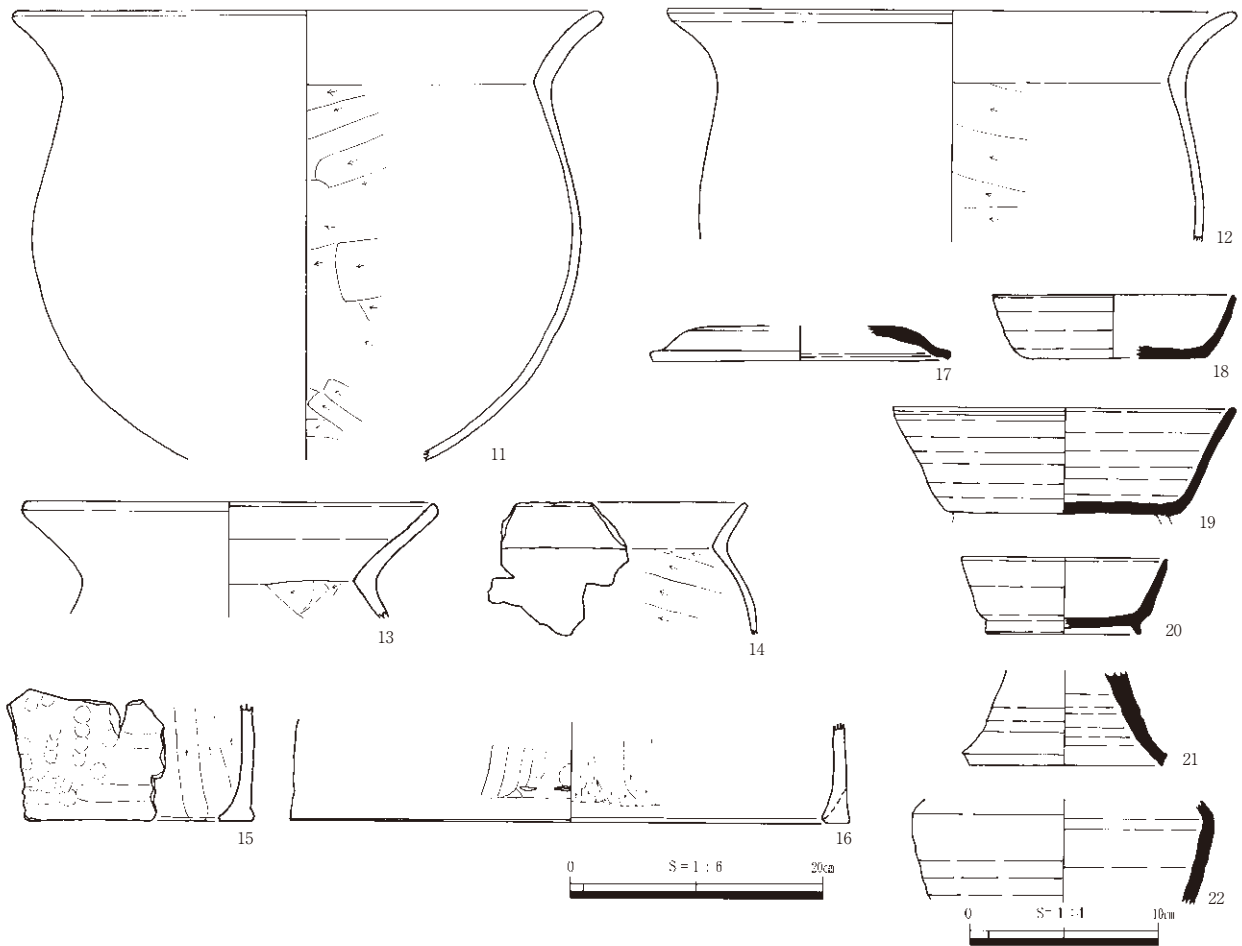
第45図 SS2土器溜り遺物出土状況

このうち、12・16・19が、F6グリッドの盛土下で検出した土器溜りで出土した遺物である。土師器甕12は盛土出土資料と接合し、土師器移動式竈16は基底部分のみが出土している。須恵器高台坏16は口縁部を下にして潰れたような状態で出土した。

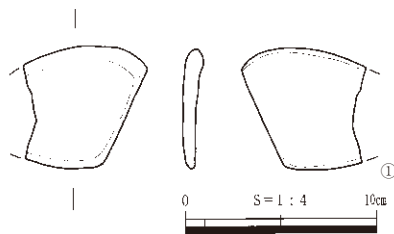
また、須恵器蓋17、須恵器高坏21、薄板状鉄製不明品①は、盛土中で出土した。その他のものは、斜面部の被覆土中で出土したものである。

出土遺物のうち、土器溜り出土の須恵器高台坏19は八峠編年奈良前期併行、盛土出土の高坏も八峠編年奈良前期併行と考えられることから、遺構は奈良時代前半以降に形成されたと考えられる。

斜面を大規模に加工、造成していることから、建物の痕跡はなかったが、対岸の西側斜面部に形成されたであろう須恵器窯群に関連する遺構の可能性も考えておきたい。



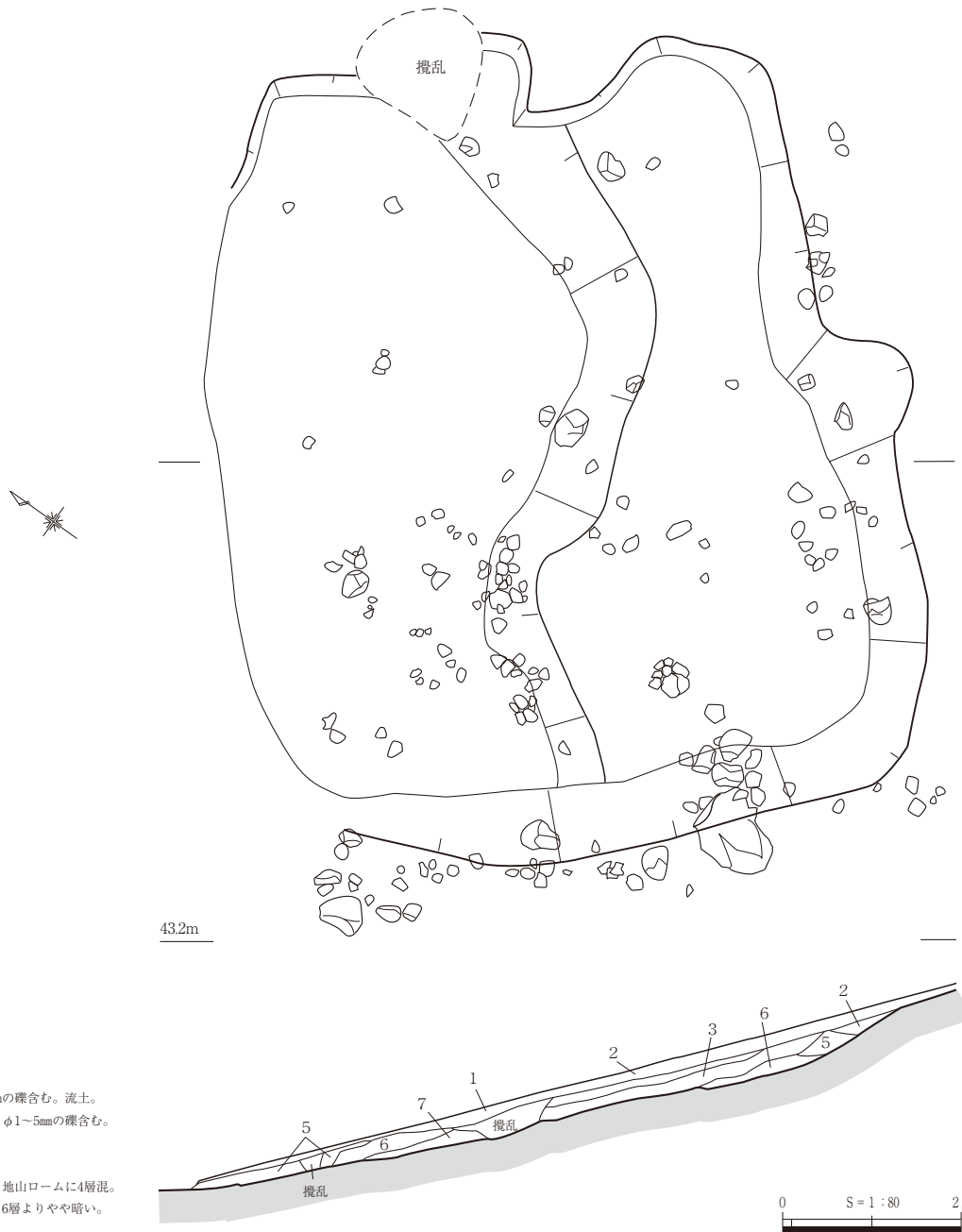
第46図 SS2出土遺物(1)



第47図 SS2出土遺物(2)



文中写真7 A区作業風景(1)



- 1 暗褐色土(10YR3/3)表土。
- 2 褐色土(10YR4/4)φ1~5mmの礫含む。流土。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)φ1~5mmの礫含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/3)
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4)地山ロームに4層混。
- 7 にぶい黄褐色土(10YR4/3)6層よりやや暗い。

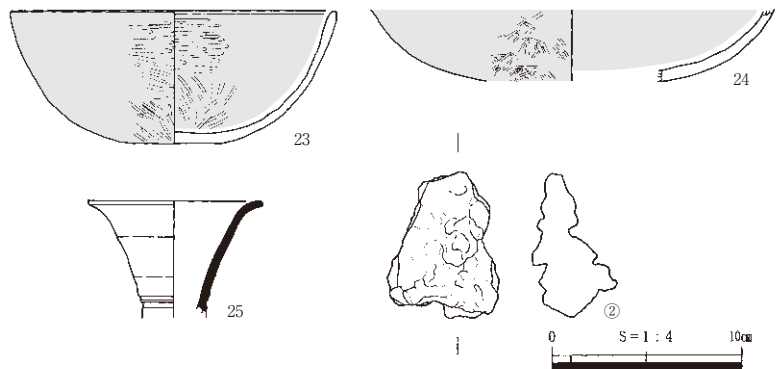
第48図 SS4

SS4 (第48・49図、PL.10・32)

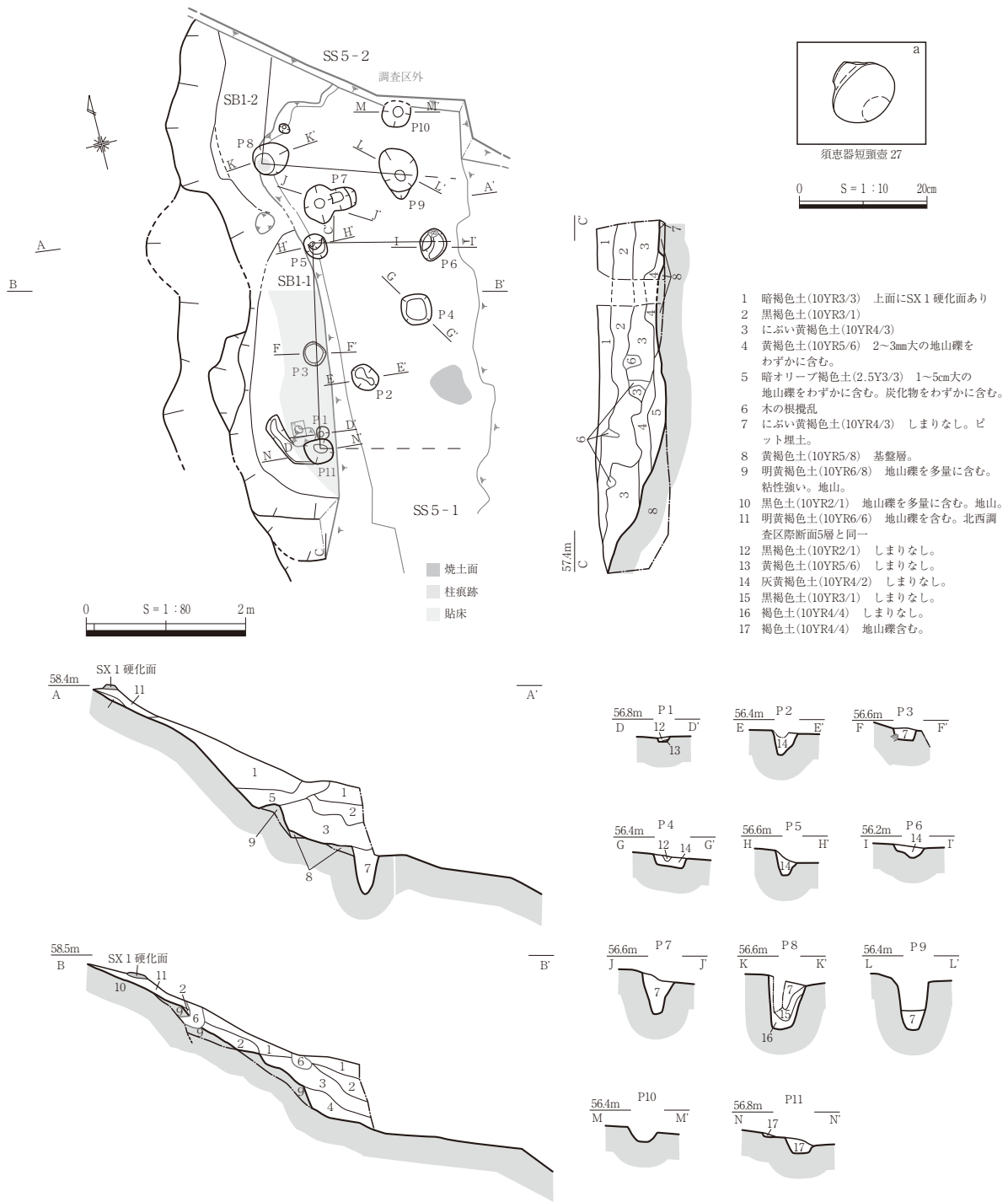
A区南東側のG4・5、H4・5グリッドにあり、標高41.4~42.8mの斜面部に立地する。ソフトローム層中で検出された。北側約5mには、製炭土坑SK1・2・11がある。

平面は不整形を呈し、長軸9.3m、短軸7.5m、深さ最大0.39mを測る。底面は段状を呈し、傾斜している。

埋土は表土を含めて7層に分層でき



第49図 SS4 出土遺物



第50図 SS5

た。

埋土中及び周辺で拳大から人頭大の大型礫や土器片等が出土している。図化した遺物には、内外面赤色塗彩される大型の土師器壺23、土師器皿又は盤24、須恵器長頸壺25、炉内滓②がある。

これらの遺物は、八峠編年奈良前期併行、奈良時代前半ごろのものと考えられることから、遺構はこの時期に掘り込まれたと考えられる。性格は不明である。

SS5、SB1 (第50・51図、表5、PL.11・33・34)

C区北西側のD13グリッドにあり、標高55.8～57.7mの急斜面に立地する。ソフトローム二次堆積土中で検出された。東側約5mには飛鳥時代の段状遺構SS6がある。

段状遺構は、急斜面をカットして平坦面が造られている。斜面下方側は大山町教育委員会による試掘トレンチが入っており、明瞭ではない。平面の形状から2つの段状遺構が造られていたものと考えられ、南側のものをSS5-1、北側のものをSS5-2として記述することとする。重複関係は不明である。平坦面に掘立柱建物が建てられていた。

SS5-1は、南北2.3m以上、東西3m以上、深さ最大0.71mを測る。平坦面には5層による貼床が認められる。

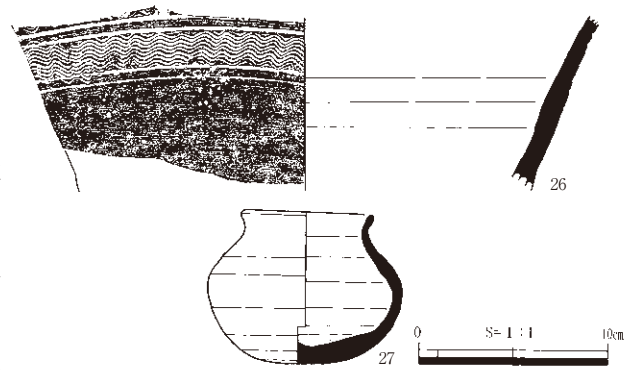
平坦面上には、掘立柱建物跡SB1-1がある。P11・3・5・6からなり、桁行2間(2.6m)、梁行1間(1.6m)以上となる。柱穴は0.13～0.33mといずれも小さく浅く、建物自体も非常に小規模である。柱穴間距離は、P11-P3間から順に1.2m、1.4m、1.6mである。身舎内に当たる南東側床面上で焼土面が検出された。

SS5-2は、調査区際で検出されたため全形が把握しがたいが、南北2m以上、東西3.8m以上、深さ最大0.91mを測る。

平坦面上には、掘立柱建物跡SB1-2がある。検出した柱穴は、P8・9のみであるが、配置や規模から掘立柱建物跡を構成するものと判断した。桁行1間(1.4m)以上、梁行1間(1.8m)以上を測るものと推定される。その他、床面上でSB1-2の柱穴と同規模のP7を検出した。P7も掘立柱建物を構成する柱穴の可能性はあるが、組み合わせる柱穴が検出されていないので、不明である。

SS5の埋土は、5層に分層できた。最上層の腐食土層以下は黄褐色土系の堆積土となる。

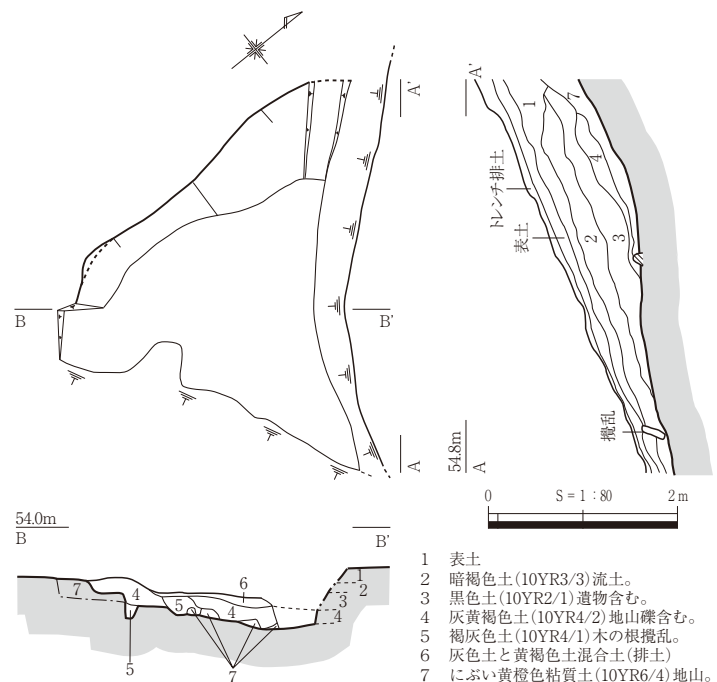
図化した出土遺物には、SS5-1床面から出土した須恵器短頸壺27、埋土中か



第51図 SS5出土遺物

表5 SS5ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	16×16-6	
P 2	32×29-28	
P 3	32×28-16	S B1-1
P 4	40×39-13	S B1-1
P 5	33×28-33	S B1-1
P 6	43×34-8	
P 7	48×38-49	
P 8	46×40-69	S B1-2
P 9	52×45-67	S B1-2
P10	34×34※-16	
P11	34×30-18	S B1-1



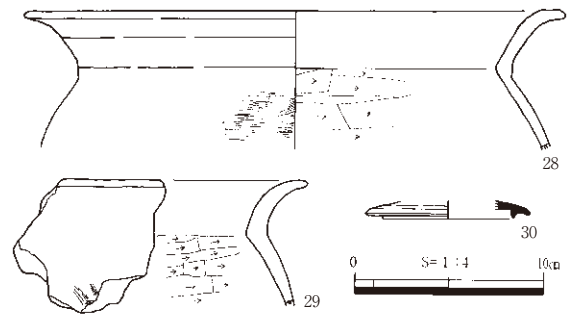
第52図 SS6

第3章 調査成果

ら出土した須恵器甕26がある。27はほぼ完形で横倒しの状態で出土した。

出土遺物のうち、短頸壺27はTK46・48併行期、飛鳥時代ごろのものと考えられ、段状遺構、掘立柱建物跡はこの時期に構築されたと考えられる。

なお、埋土中出土の炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で1,360±20BP.という数値を得た。暦年較正では7世紀中ごろから後半と考えられ、調査の所見と一致する。



第53図 SS6出土遺物

SS6 (第52・53図、PL.12・34)

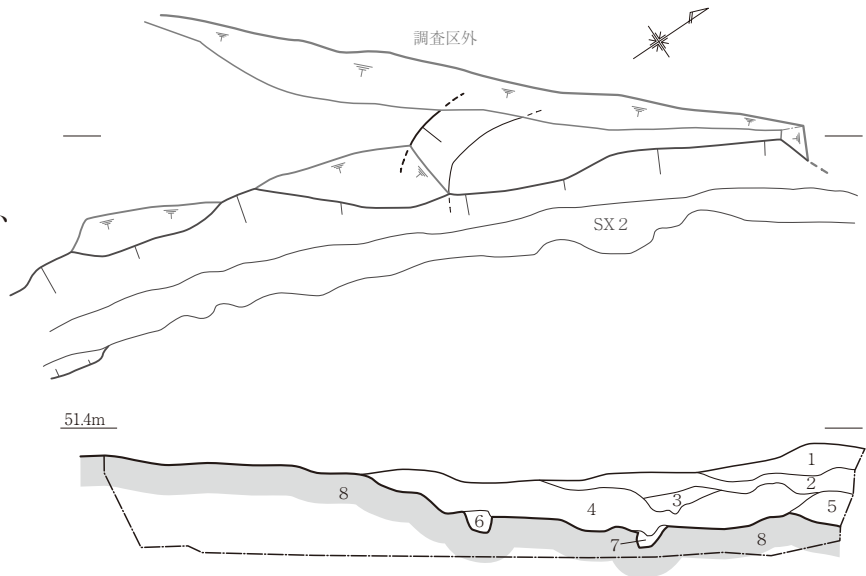
C区中央北側調査区際のD12、E12グリッドにあり、標高52.5～54.0mの急斜面に立地する。西側約5mには飛鳥時代の段状遺構SS5、東側約6mには飛鳥時代の段状遺構SS8・9がある。ソフトローム二次堆積土中で検出した。

調査区際で検出し、大半は北側調査区外へ延びている。検出した範囲では、南北4m以上、東西3m以上、深さ最大0.93mを測る。平坦面は傾斜し、凹凸が見られる。建物等の施設は検出されなかった。

埋土は、3・4層の2層に分層できた。3層は腐食土層で、遺物を包含する。4層はくすんだ黄褐色土系の堆積土である。

遺物は、埋土中から出土した土師器甕28・29、須恵器蓋30を図化した。土師器甕は口縁部が大きく外反する。須恵器蓋30は口径が小さく、壺に伴う蓋の可能性はある。

出土遺物から、SS6はTK46・48併行期、飛鳥時代ごろの段状遺構と考えられる。調査範囲では建物の痕跡は認められなかったが、調査区外に建物跡が存在する可能性がある。



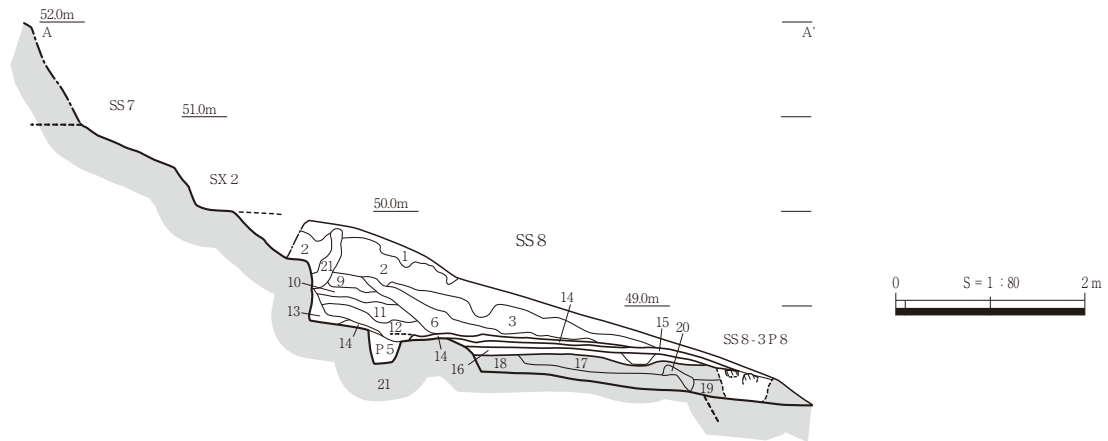
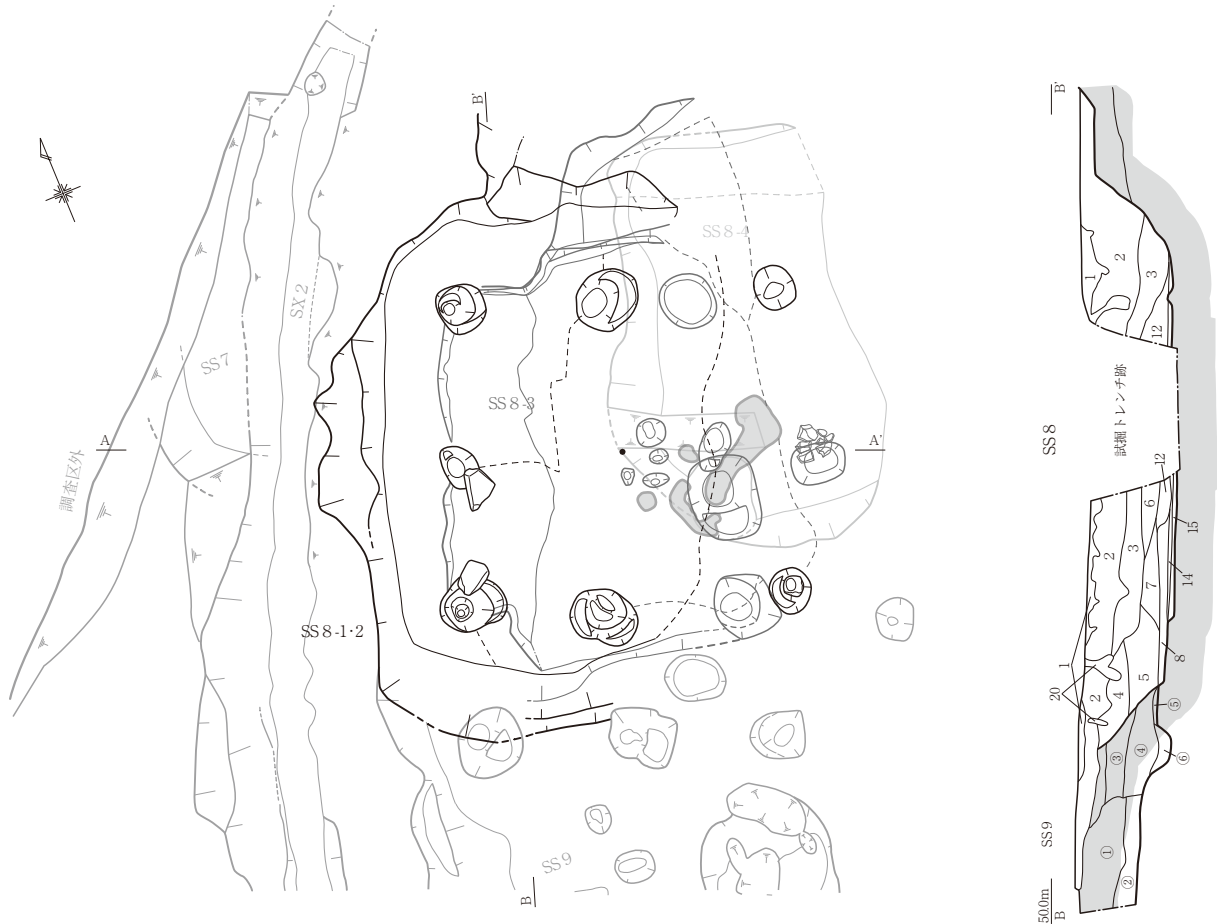
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまりなし。
- 2 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。流土。
- 3 黒褐色土 (10YR3/2) しまりなし。
- 4 黒色土 (10YR2/1) 地山礫をわずかに含む。土器を含む。
- 5 黒褐色土 (10YR2/3) 5～10cm大の地山礫を含む。
- 6 褐灰色土 (10YR4/1) しまりなし。黒色土が混じる。
- 7 褐色土 (10YR4/4) 1～2cm大の地山礫をわずかに含む。
- 8 黄褐色土 (10YR5/8) ソフトローム～砂層。地山。

第54図 SS7

SS7 (第54図、PL.12)

C区中央北側調査区際のD10グリッドにあり、標高50.3～50.8mの急斜面に立地する。調査区際でごくわずかに検出できた遺構で、東側はSX2によって掘削されている。ソフトロームの二次堆積土中で検出した。

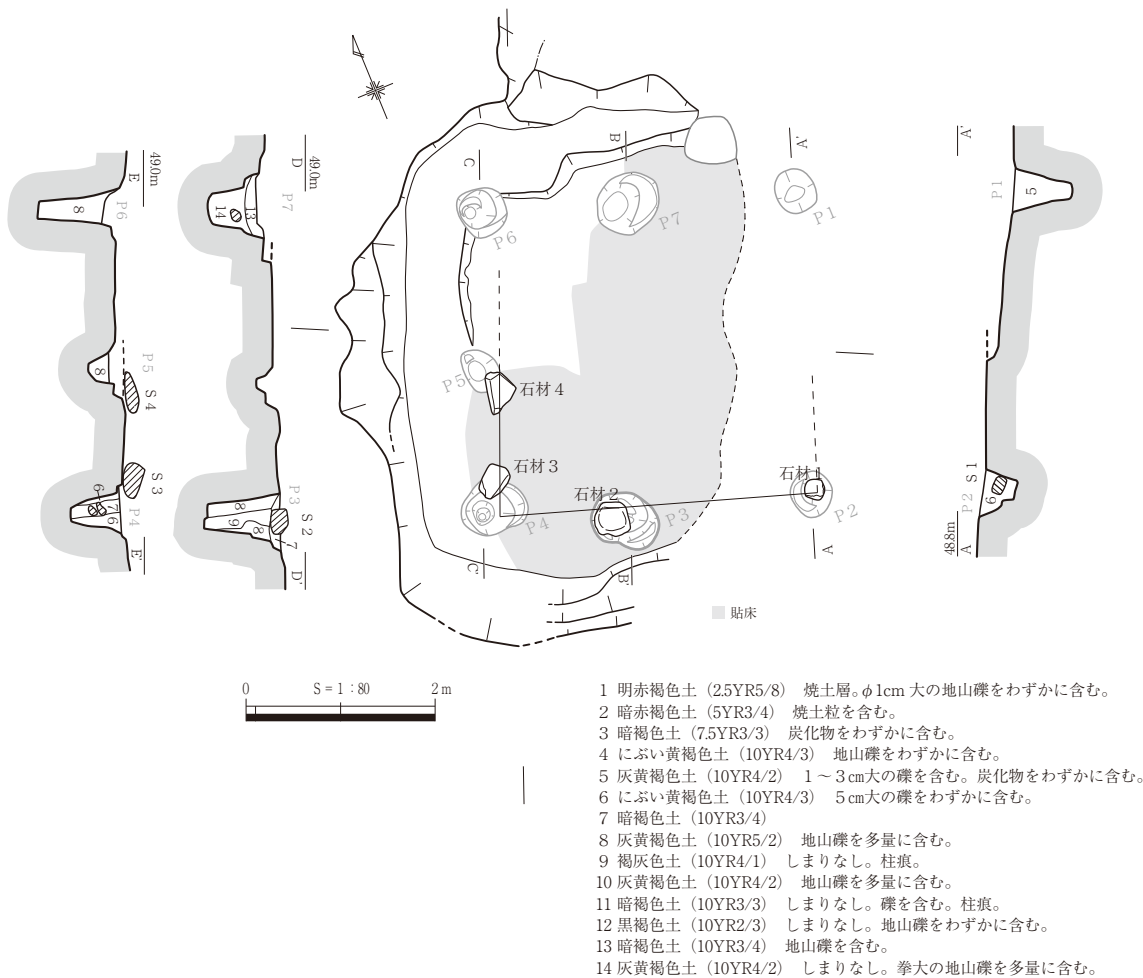
規模は南北2m以上、東西0.8m以上、深さ最大0.34mを測る。平坦面はかなり傾斜し、建物等の



- 1 黒褐色粘土質シルト (10YR2/4) 粘性あり。しまりやや弱。表土下層。
灰黄褐色シルト (10YR4/2) 粘性あり。しまりあり。小礫を若干含む。
- 2 褐色粘土質シルト (10YR4/4) 粘性ややあり。しまり弱。
- 3 褐色粘土質シルト (10YR4/3) 粘性ややあり。しまり弱。小礫 (φ5~10mm程度) を多く含む。
- 4 褐色シルト (10YR4/3) φ5mm大の礫を含む。
- 5 褐色シルト (10YR4/3) φ1~4mm大の礫を含む。
- 6 褐色粘土質シルト (10YR4/4) 粘性あり。しまり弱。小礫を若干含む。
- 7 褐色シルト (10YR4/4) 礫を多量に含む。
- 8 褐色シルト (10YR4/4) 礫を多量に含む。よくしまる。
- 9 褐色粘土質シルト (10YR4/6) 粘性あり。しまりややあり。比較的均一。
- 10 灰黄褐色粘土質シルト (10YR4/2) 粘性ややあり。しまりあり。小礫を含む。
- 11 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4) 粘性あり。しまりあり。φ5mm大の小礫を含む。
- 12 暗褐色粘土質シルト (10YR3/3) 粘性あり。しまりあり。φ5mm大の礫を含む。
- 13 黒褐色粘土質シルト (10YR2/3) 粘性あり。しまりあり。
- 14 褐色シルト (10YR4/4) 粘性弱。しまり極めてかたい。φ5mm大の礫を多量に含む。SS8-1貼床。
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性弱。しまりよくしまる。地山礫をわずかに含む。SS8-2貼床。
- 16 暗褐色土 (10YR3/4) 上層黄褐色地山礫含み、よくしまる。SS8-3貼床。
- 17 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ3~5cm大の地山礫をわずかに含む。しまりなし。
- 18 黒褐色土 (10YR3/2) φ1cm以下の地山礫を含む。しまりなし。
- 19 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。
- 20 木の根擾乱
- 21 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性弱。しまり極めてかたい。φ1~20cm程度の礫を多量に含む。御来屋礫層。

- SS9埋土
- ① 褐色土 (10YR4/4) 地山礫をわずかに含む。炭化物をわずかに含む。
 - ② 暗褐色土 (10YR3/4) 地山礫を含む。
 - ③ にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山礫をわずかに含む。
 - ④ 暗褐色土 (10YR3/3) φ5~10cm大の地山礫を多量に含む。炭化物をわずかに含む。
 - ⑤ にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 地山礫を含む。よくしまる。
 - ⑥ 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。地山礫をわずかに含む。

第55図 SS8



第56図 SS8-1・SB2-1

痕跡は検出されなかった。

埋土は、表土を除くと3~5層の3層に分層できた。いずれも黒褐色土系の埋土である。

埋土中から土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

詳細な時期は不明であるが、その他の同類の遺構が飛鳥時代であることから、当遺構についても同時期の可能性はある。

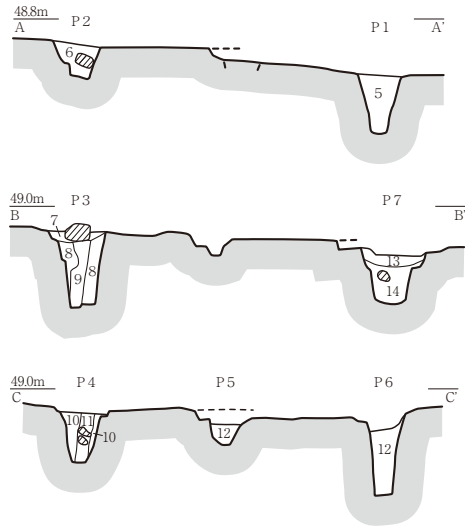
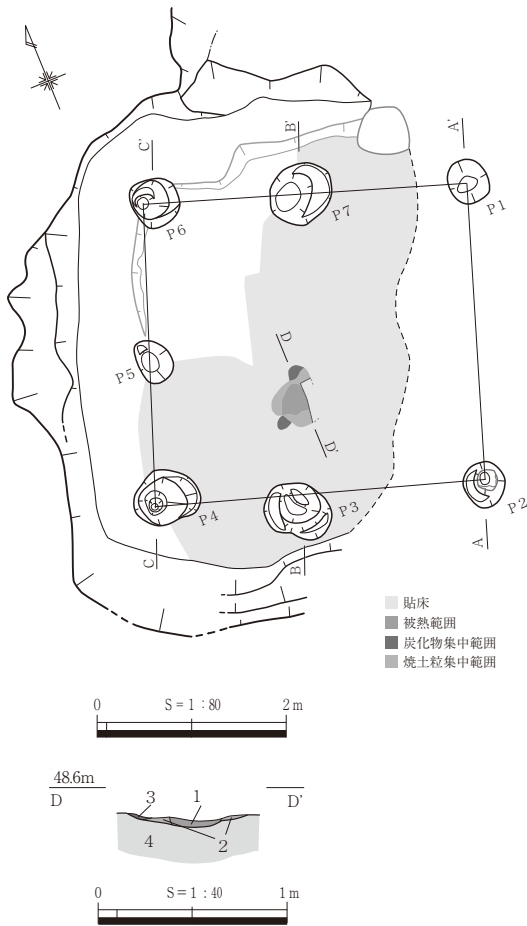
表6 SS8・SB2ピット一覧表

SS8、SB2 (第55~63図、表6、PL.12・13・77・79、巻頭図版4)

C区中央北側のD11、E11・12グリッドにあり、標高48.1~49.9mの急斜面に立地する。ソフトローム二次堆積土から御来屋礫層中で検出した。南側はSS9と重複しているが、土層観察によりSS9の廃絶後に掘り込まれた遺構と判明した。西側約5mには飛鳥時代の段状遺構SS6、東側約4mには段状遺構SS15がある。

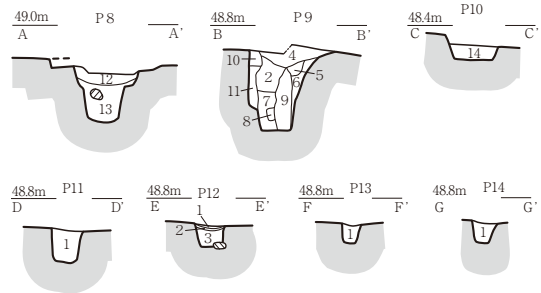
段状遺構は、急斜面をカットして平坦面を作り出しているが、中央部分は大山町教育委員会の試

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	47×39-69	SB2-2柱穴
P2	50×43-69	SB2-2柱穴
P3	73×54-85	SB2-2柱穴。柱痕幅18cm
P4	70×56-68	SB2-2柱穴。柱痕幅14cm
P5	48×36-35	SB2-2柱穴
P6	52×50-93	SB2-2柱穴
P7	70×61-62	SB2-2柱穴
P8	80×63-55	
P9	71×63-86	
P10	60×42-25	
P11	54×31-30	
P12	33×29-32	
P13	20×15-22	
P14	28×15-27	
P15	63×55-27	
P16	90×71-69	柱痕幅20cm



- 1 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 焼土層。φ1cm 大の地山礫をわずかに含む。
- 2 暗赤褐色土 (5YR3/4) 焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化物をわずかに含む。
- 4 におい黄褐色土 (10YR4/3) 地山礫をわずかに含む。
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) 1～3cm 大の礫を含む。炭化物をわずかに含む。
- 6 におい黄褐色土 (10YR4/3) 5cm 大の礫をわずかに含む。
- 7 暗褐色土 (10YR3/4)
- 8 灰黄褐色土 (10YR5/2) 地山礫を多量に含む。
- 9 褐色土 (10YR4/1) しまりなし。柱痕。
- 10 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫を多量に含む。
- 11 暗褐色土 (10YR3/3) しまりなし。礫を含む。柱痕。
- 12 黒褐色土 (10YR2/3) しまりなし。地山礫をわずかに含む。
- 13 暗褐色土 (10YR3/4) 地山礫を含む。
- 14 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。拳大の地山礫を多量に含む。

第57図 SS8-1・SB2-2



- 1 暗褐色土 (10YR3/4)
- 2 におい黄褐色土 (10YR5/3) 地山ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) 地山ブロックをわずかに含む。
- 4 におい黄褐色土 (10YR5/4) 地山礫・炭化物をわずかに含む。
- 5 におい黄褐色土 (10YR6/4) しまりなし。地山礫を多量に含む。
- 6 褐色土 (7.5YR4/3) 均質。
- 7 におい黄褐色土 (10YR5/4) 地山礫を含む。
- 8 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫を多量に含む。
- 9 におい黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。柱痕。
- 10 におい黄褐色土 (10YR6/4)
- 11 におい黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。
- 12 暗褐色土 (10YR3/4) 地山礫を含む。
- 13 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりなし。拳大の地山礫を多量に含む。
- 14 におい黄褐色土 (10YR4/3) しまりなし。地山礫をわずかに含む。

第58図 SS8-2

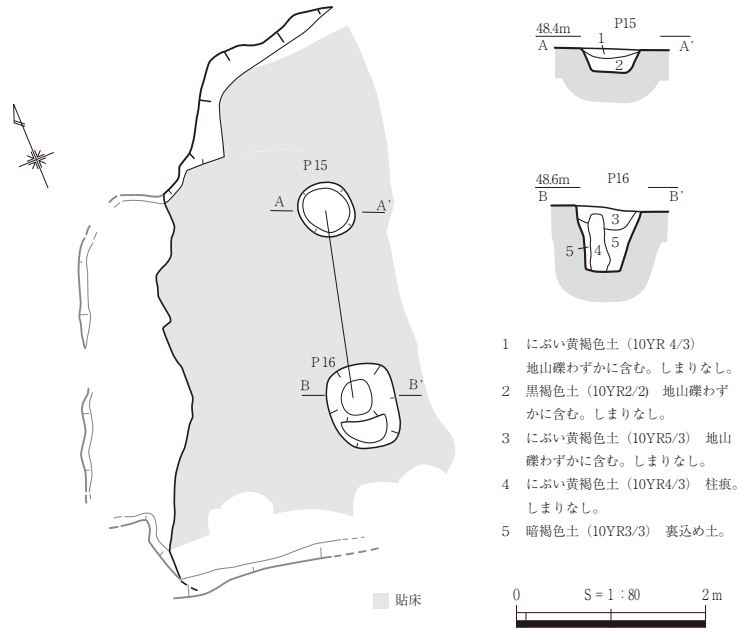
第3章 調査成果

掘トレンチによって既に掘り込まれ、東側斜面下方は町道の掘削によって削り取られているため、必ずしも遺存状態は良好ではなく、南北6m、東西5m以上、深さ最大1.11mを測る範囲にある。平坦面は少なくとも4回の造り直しがあったものと考えられ、新しいものからSS8-1、SS8-2、SS8-3、SS8-4とする。また、それぞれに礎石建物、掘立柱建物などが付属したと考えられる。

堆積層を観察すると、7層より上方が段状遺構の埋土の可能性があり、以下は貼床層になると考えられる。8層は10cm前後の厚さで礫を多量に含みよく締まる層で、後述するSB2-1に伴う貼床層と判断した。14層は、5cm前後の厚さでよく締まる褐色土系の層で、SS8-1・SB2-2の貼床層と判断した。15層も5cm前後の厚さでよく締まる黄褐色土系の層で、SS8-2の貼床と判断した。16層は8~10前後のよく締まる暗褐色土系の層で、SS8-3の貼床と判断した。なお、17層以下は締まりがなく段状遺構の掘削時に床面成形された層と考えられる。

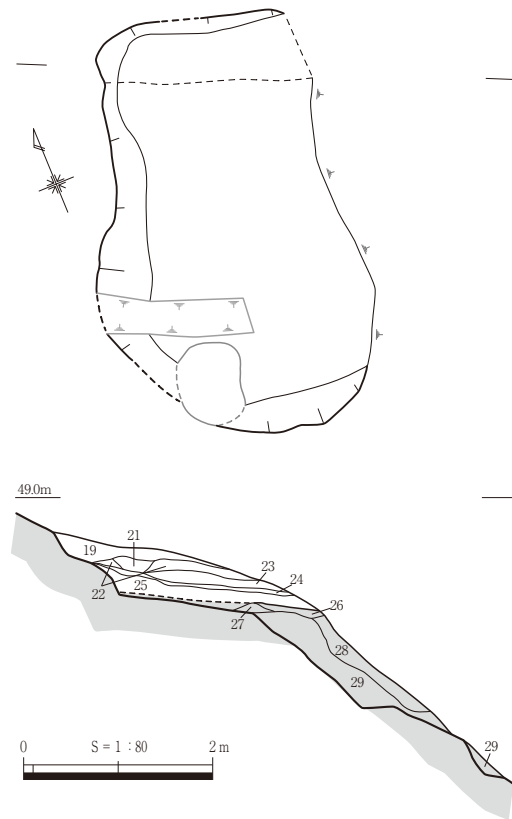
SS8-1は、平坦面の規模が南北4.7m、東西4.6m以上を測る。同一の掘り込み面を利用して掘立柱建物(SB2-2とSB2-1)が重複して造られている。SB2-1は石材を用いた建物で、調査段階では把握できていなかったが、改めて図面等を検討して確認している。SB2-2の廃絶後にSB2-1が造られたと判断した。

SB2-1は、礎石建物の可能性もあるが、石材がSB2-2の柱穴上又は近辺にあること、すべての柱穴に伴わないことから、部分的に柱根に石材をはめ込んだ建物と考えられる。遺存していた石材は4個(石材1~4)で、石材1はSB2-2の柱穴P2内に落ち込んだもの、石材2は大型の金床石⑦を転用したものである。いずれの石材も均等に並ばず、SB2-2の柱穴上又は近辺に置かれたものであることから、おそらく、SB2-2を修復する際に、腐朽した柱根に石材をはめ込んだものと考えられ



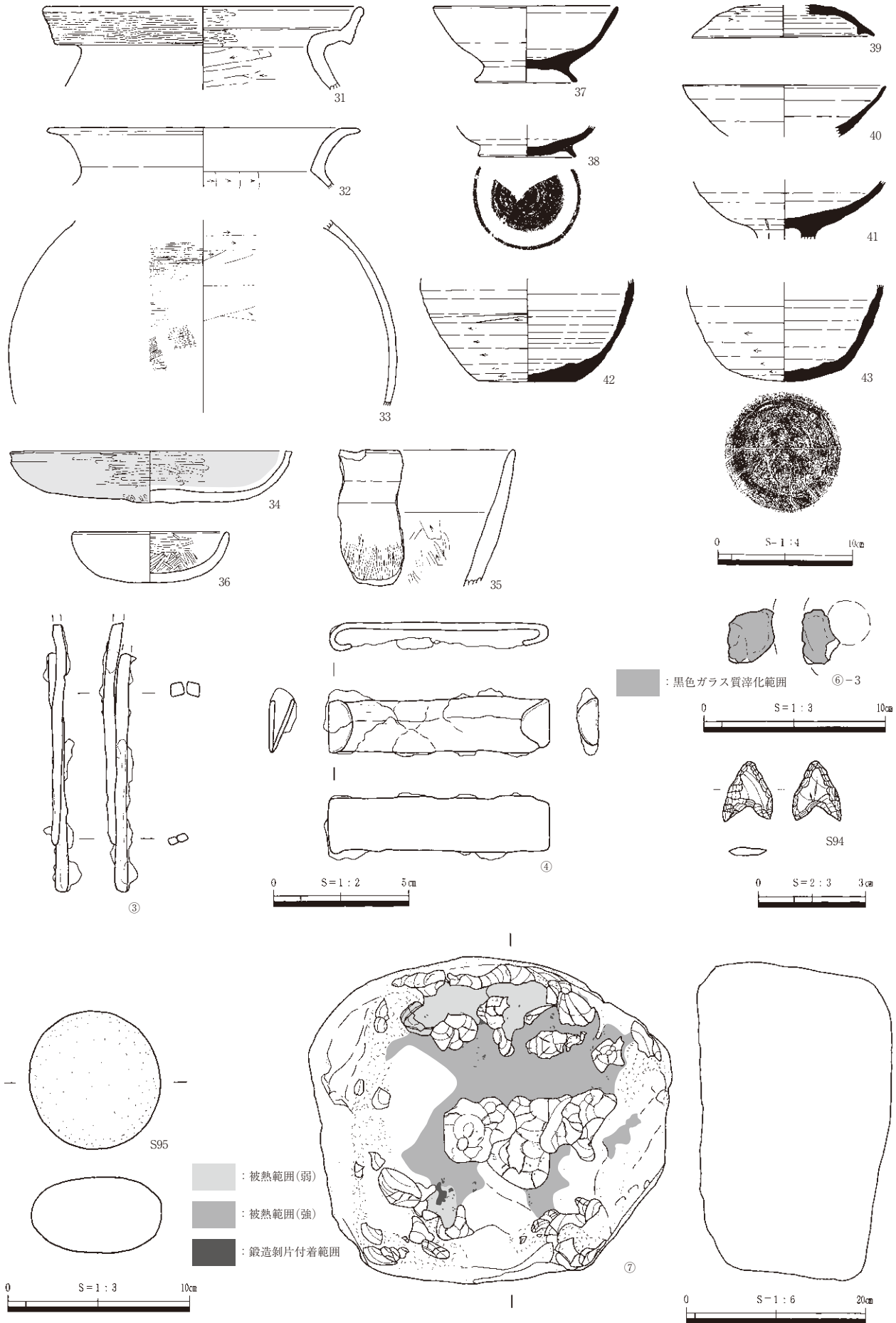
- 1 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 地山礫わずかに含む。しまりなし。
- 2 黒褐色土 (10YR2/2) 地山礫わずかに含む。しまりなし。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 地山礫わずかに含む。しまりなし。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 柱痕。しまりなし。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 裏込め土。

第59図 SS8-3



- 19 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) やや粘質。
- 21 黒褐色土 (10YR3/1)
- 22 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 地山礫をわずかに含む。
- 23 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫をわずかに含む。
- 24 灰黄褐色土 (10YR4/2) とにぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混じる。
- 25 黒褐色土 (10YR3/1) 下層に地山礫を多量に含む。
- 26 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫を含む。
- 27 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粘質。地山か。
- 28 黒褐色土 (10YR3/2) 地山。
- 29 黒褐色土 (10YR3/1) 地山。

第60図 SS8-4



第61図 SS8出土遺物

第3章 調査成果

る。規模は、桁行2間(3.2m)、梁行2間(3.0m)程度と考えられ、後述するSB2-2と同規模の建物と考えられる。

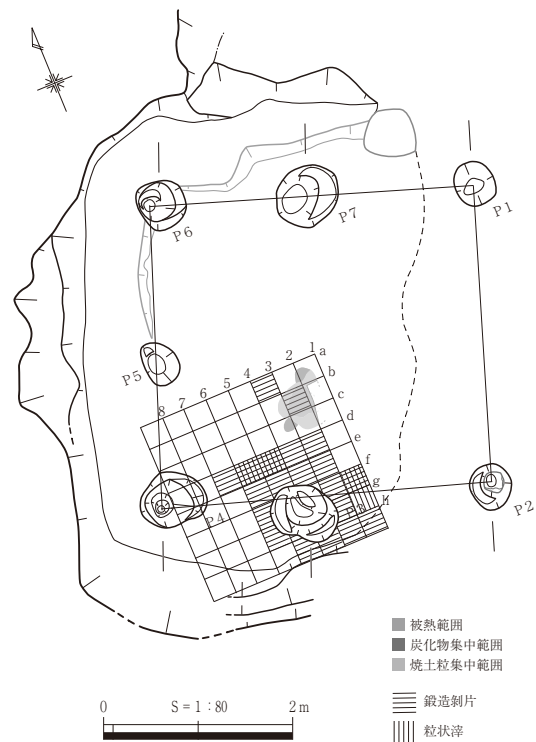
SB2-2は、SS8-1上に造られた掘立柱建物跡である。桁行2間(3.2m)、梁行2間(3.0m)の規模になると考えられるが、東側柱筋には中央に該当する柱穴が検出されておらず、流失したものと考えられる。柱穴は、径0.36~0.73m、深さ0.35~0.93mを測る。隅柱となるP1・2・4・6や柱筋の中間にあるP3・7は深さが0.68~0.93mと深く、特にP3・7はそれぞれ0.85、0.93mと深く、P5は0.35mと浅いことから、P3・7が棟を支える柱穴、P5は間柱であったと考えられる。床面には14層による貼床が施されている。14層貼床上では、身舎内の南側で0.33×0.25m以上の範囲で不整形な焼土面が検出された。赤化が進んだ焼土面の周囲には赤化の進んでいない層があり、その外周に炭化物を含む層が散在的に認められる。8・12・14層中からは、P3周辺で鍛造剥片・粒状滓が出土していることから、この焼土面は鍛冶炉の基底部分であったと考えられる。

SS8-2は、SS8-1より一回り狭く、15層による貼床が施される範囲に平坦面が形成されたと考えられる。西側床面は御来屋礫層を段状に掘り込む範囲の内側になる。貼床上の中央やや東側で焼土面、南西側で炭化物が薄くへばりつく状態で検出され、鍛冶関連の微細遺物も出土していることから、この面においても鍛冶が行われていた可能性がある。

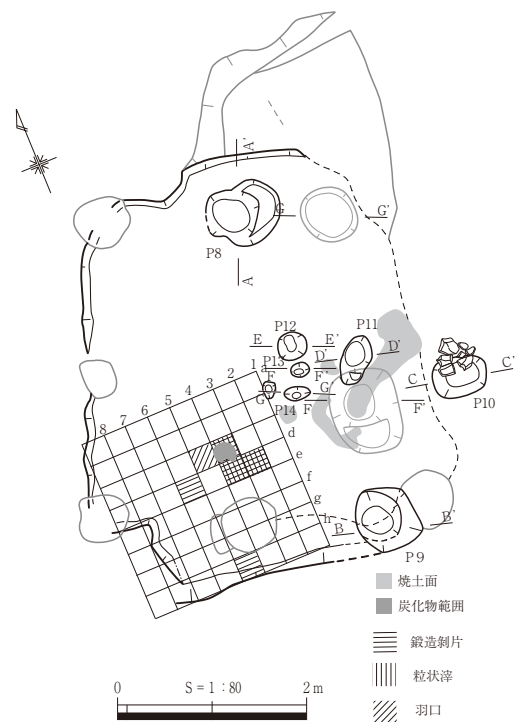
この面でSS8-2に伴う掘立柱建物もあったと考えられるが、15層上で検出した新たなピット(P8・9)は、柱穴にふさわしい規模をもつが、不規則な配置である。なお、P8はP7と重複しているピットである。その他にP10~14を検出したが、いずれも柱穴とは考えにくい。

SS8-3は、中央から北側に張り出す範囲で検出された、16層による貼床からなる。この面において検出したP16では柱痕が認められるが、明確な建物の痕跡はない。

SS8-4は、SS8-3以下の基盤層である17層以下を掘り下げた段階で検出した遺構である。北東側に飛び出した南北4.4m、東西2.2m以上の範囲に、最大0.3mの深さで掘り込んでいる。平坦面の範



第62図 SS8-1・SB2-2鍛冶関連
微細遺物検出状況



第63図 SS8-2鍛冶関連微細遺物検出状況

囲は、南北4.0m、東西2.2m以上を測る。3～5cm程度の厚さの25層が貼床となる可能性があるが、締まりが弱い。27層以下が基盤層となる。SS8-3との間にはかなりの時期差があると考えられる。

図化した出土遺物には、埋土上層では弥生土器甕31、土師器盤34、移動式竈片36、須恵器高台坏37、須恵器坏蓋39、須恵器壺胴部43、鉄鏃茎部③、手鎌④、羽口片⑥-3、金床石⑦がある。埋土下層では、北側で出土した土師器甕胴部33、土師器埴35、須恵器高坏坏部40、須恵器高坏41、須恵器壺底部42、サヌカイト製凹基無茎石鏃S94、安山岩製擦石S95がある。底面付近では、南西側コーナー付近で出土した土師器甕32、北東側のP1付近で出土した須恵器高台坏38がある。底面ではP3脇から出土した金床石⑦がある他、貼床層中から羽口⑥-3、粒状滓、鍛造剥片が出土した。手鎌④は穂摘み具の刃部と考えられ、基部は木台をはめ込む折り返しが付き、木質が遺存している。羽口⑥-3は鍛冶炉羽口の先端部で、先端部にガラス質滓が付着する。

貼床面の鍛冶関連遺物については、床面検出段階で金床石の存在に気付いていたことから、金床石⑦を中心とする2m×2mの方形グリッドを設定し、さらにグリッドを25cmの小グリッドに区画して、区画ごとに貼床土壌を採取し水洗選別を行い、微細遺物を回収した。小グリッドは南北方向をa～h、東西方向を1～8と番号を付し、北東隅の交点を小グリッド名とした。数量分布を試みたが、出土量が微量であったため、種類毎の分布を示す。

調査の結果、SS8-1・SB2-2では第62図に示したグリッドで微細遺物が出土し、P3を中心に鍛造剥片や粒状滓、鉄滓片を回収している。SB2-1で転用されていた金床石⑦は、本来は鍛冶炉とP3の間あたりに据え置かれていたと推察される。

SS8-2では第63図に示したグリッドで微細遺物が出土し、鍛造剥片や粒状滓、鉄滓、羽口片を回収した。SS8-1・SB2-2で検出された範囲より狭く、分布の中心が小グリッドの北東側に集中することから、P11～14は鍛冶に関連するピットの可能性が考えられる。

底面付近で出土した須恵器、土師器は、概ねTK46・48併行期、飛鳥時代ごろのものと考えられる。

SS8・SB2は、時期的に遡る可能性があるSS8-4を除いて、概ね飛鳥時代ごろに改築されながら造営された鍛冶工房と考えられる。

なお、SB2-2に伴うと考えられる貼床15層中出土の炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で1,310±20BP.という数値を得た。暦年較正では7世紀中ごろから8世紀中ごろと考えられ、調査の所見と一致する。

表7 SS9・SB3、SA2ピット一覧表

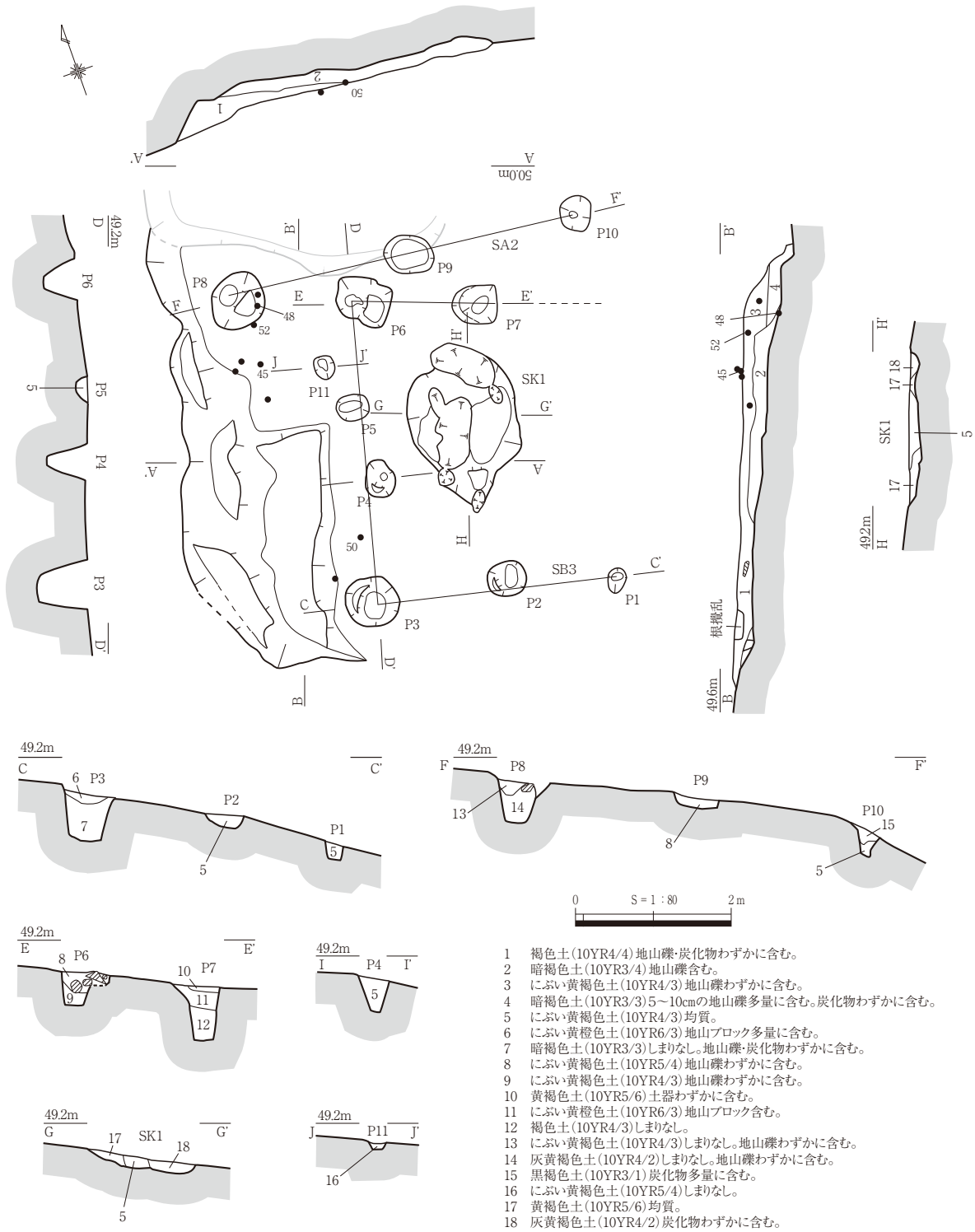
SS9、SB3、SA2(第64・65図、表7、PL.16・33・35)

C区中央北側のE11・12グリッドにあり、標高48.3～49.9mの急斜面に立地する。ソフトローム二次堆積土中で検出した。北側はSS8によって、東側は町道によって掘削されている。

斜面部をカットして平坦面を作り出しているが、水平ではなくかなり傾斜している。南北5.0m以上、東西6.0m以上、深さ最大1.04mを測る。

平坦面には、SB3が造られている。桁行3間

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	33×24-30	SB3
P2	49×43-21	SB3
P3	70×62-72	SB3
P4	50×39-50	SB3
P5	42×33-15	SB3
P6	69×53-44	SB3
P7	58×48-52	SB3
P8	87×68-64	SA2
P9	65×48-10	SA2
P10	45×40-32	SA2
P11	30×26-8	
SK1	190×135-12	

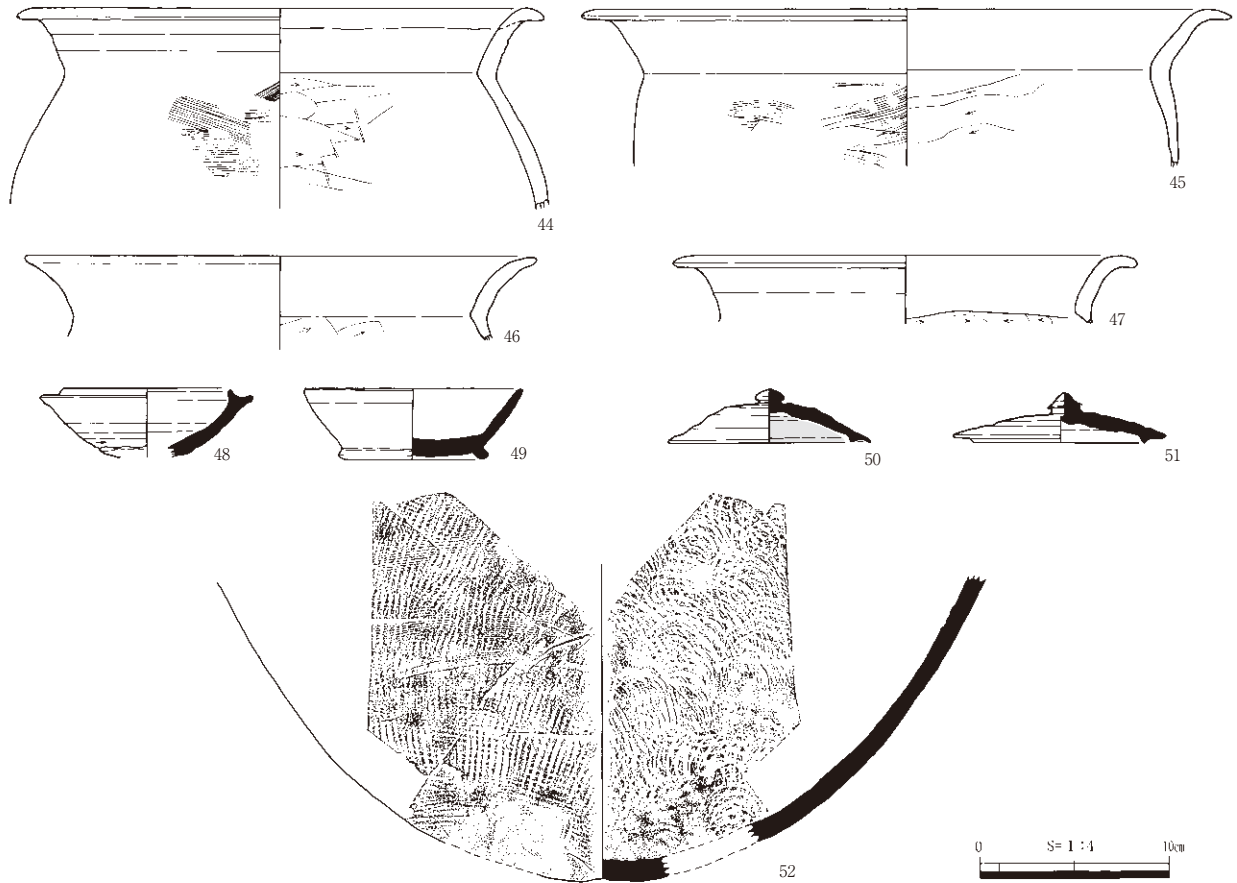


第64図 SS9・SB3・SA2

(3.9m)、梁行2間(3.1m)に復元できる。長軸方向はN-14° -Eである。東側は遺存していないので不明であるが、南北棟の建物と思われる。隅の柱穴は深さがある。桁側の柱筋は揃わない。身舎内には、不整形に掘り込まれた土坑SK1があるが、性格は不明である。

また、SB3の北側に、長さ4.6mを測り、主軸N-86° -EのSB3と主軸が異なる3基からなる柱列があり、柵列SA2とした。柱穴間距離はP8 - P9間から順に2.4m、2.2mである。

埋土は2層に分層できた。いずれも暗褐色土系の埋土である。



第65図 SS9出土遺物

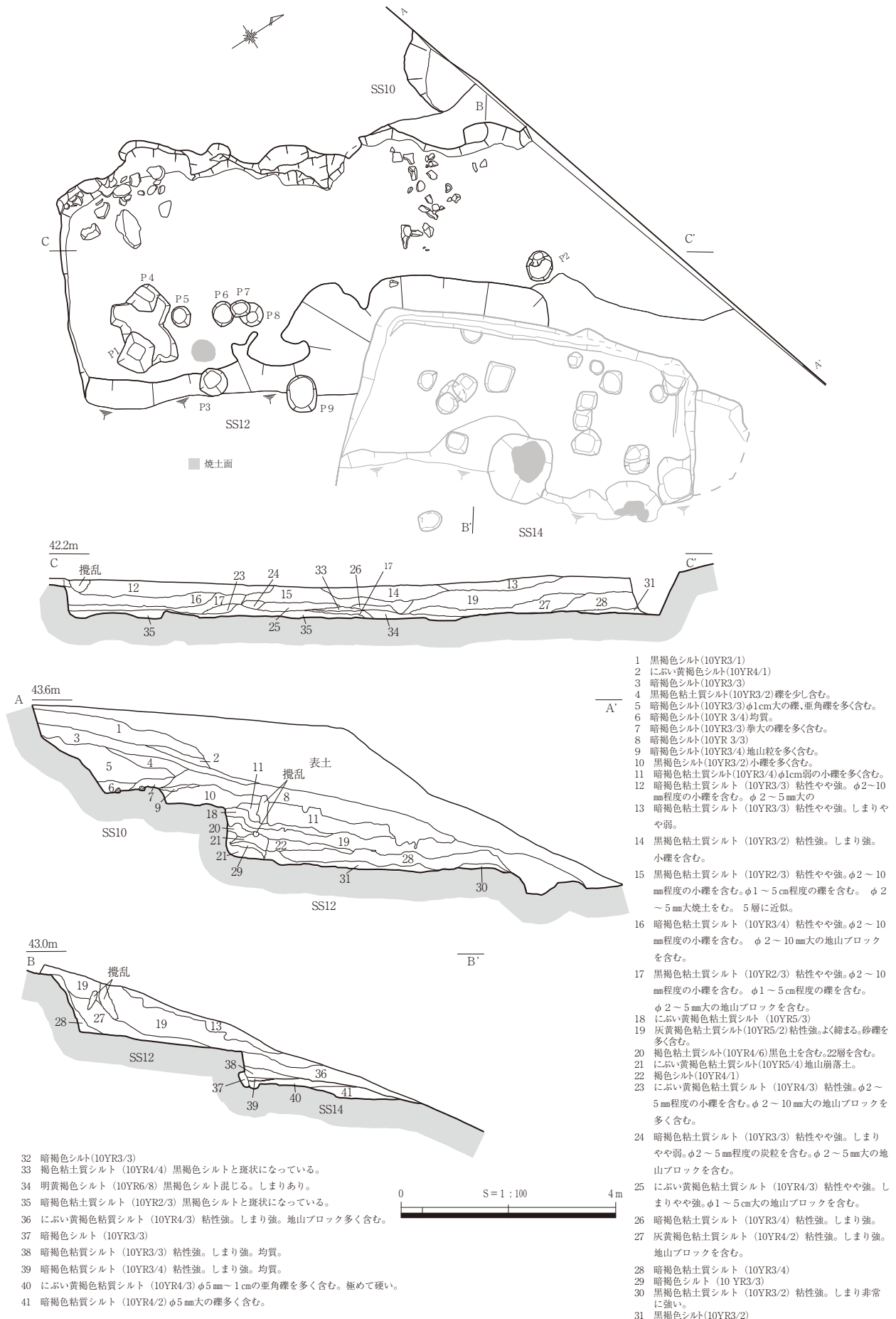
図化した遺物には、埋土中から出土した土師器甕44～47、須恵器坏身48、須恵器高台坏49、須恵器坏蓋50・51、須恵器甕52がある。

出土遺物は、TK46・48併行期、飛鳥時代ごろのものと考えられ、SS9・SB3・SA2ともこの時期の遺構と考えられる。

なお、埋土中出土の炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $1,240 \pm 20\text{BP}$.という数値を得た。暦年較正では7世紀後半から9世紀中ごろと考えられ、SS8より新しいものとされた。ただし、調査の所見では、切り合い関係からSS8が後出することは明らかである。

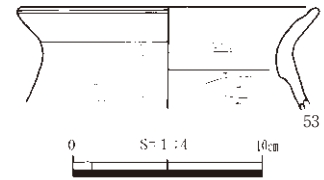
SS10(第66・67図 PL.17・36)

C区中央北側のD10グリッドにあり、標高42.8～43.4mの急斜面に立地する。東下方約2mにはSS12がある。ソフトローム二次堆積土である黄褐色粘土質シルトの上に、遺物を含む暗褐色シルトが厚く堆積していたことから、土層堆積状況を把握する目的で、北側調査区際に沿ってトレンチを設定したところ、本遺構を確認した。



第66図 SS10・12

検出した部分は、段状遺構の南西隅である。南北1 m程度、東西3 m程度を確認したにすぎず、全体の形状や規模は不明である。掘方下半部は、黄褐色粘土質シルトを掘り込んで造られている。南西壁は、約45°の角度で立ち上がっていることから、廃棄後の侵食等により形状が損なわれたと考えられる。底面は、壁側は地山である黄褐色粘土質シルト、谷側は9層による貼床が施されている。平坦面上では、建物等の痕跡は検出されなかった。



第67図 SS10出土遺物

土層断面の観察では、SS12の堆積土の上に形成された10層上に、SS10の貼床層と考える9層が形成されていることから、SS12より新しいことを示している。床面に近い最下層(6・7層)は水平堆積を基調としているが、これより上層は、斜面上方から流れ込んだように形成された堆積である。

図化した出土遺物には、埋土中から出土した土器器甕53がある。口縁部が直線的に開く。

出土遺物から、奈良時代ごろの段状遺構と考えられる。

SS12(第66・68～71図、表8、PL.17・18・36～41、巻頭図版4)

C区の中央北側のC9、D9・10グリッドにあり、標高41.1～42.5mの急斜面に立地する。西上方約2 mにはSS10、南西側約3 mにはSS13があり、北東側はSS14と切り合う。ソフトローム二次堆積土である黄褐色粘土質シルトの上に、遺物を含む暗褐色シルトが厚く堆積していたことから、土層堆積状況を把握する目的で、北側調査区際に沿ってトレンチを設定したところ、本遺構を確認した。SS12の基盤層は、基本土層24層である。草木根や小動物による攪乱により、遺構端に乱れが生じていた。南東端はSS14付近で御来屋礫層があった以外はやはり24層である。SS12の北端は、調査区外に延びていた。南端部は基本土層と遺構内堆積土の区分は不明瞭であったが、遺構が造られる以前に生じた地山の割れ目に砂が詰まった地形があり、これを目安にして掘り下げた。また、南東隅を中心に、地山には礫層が形成されていたことも、遺構の検出に役立てた。

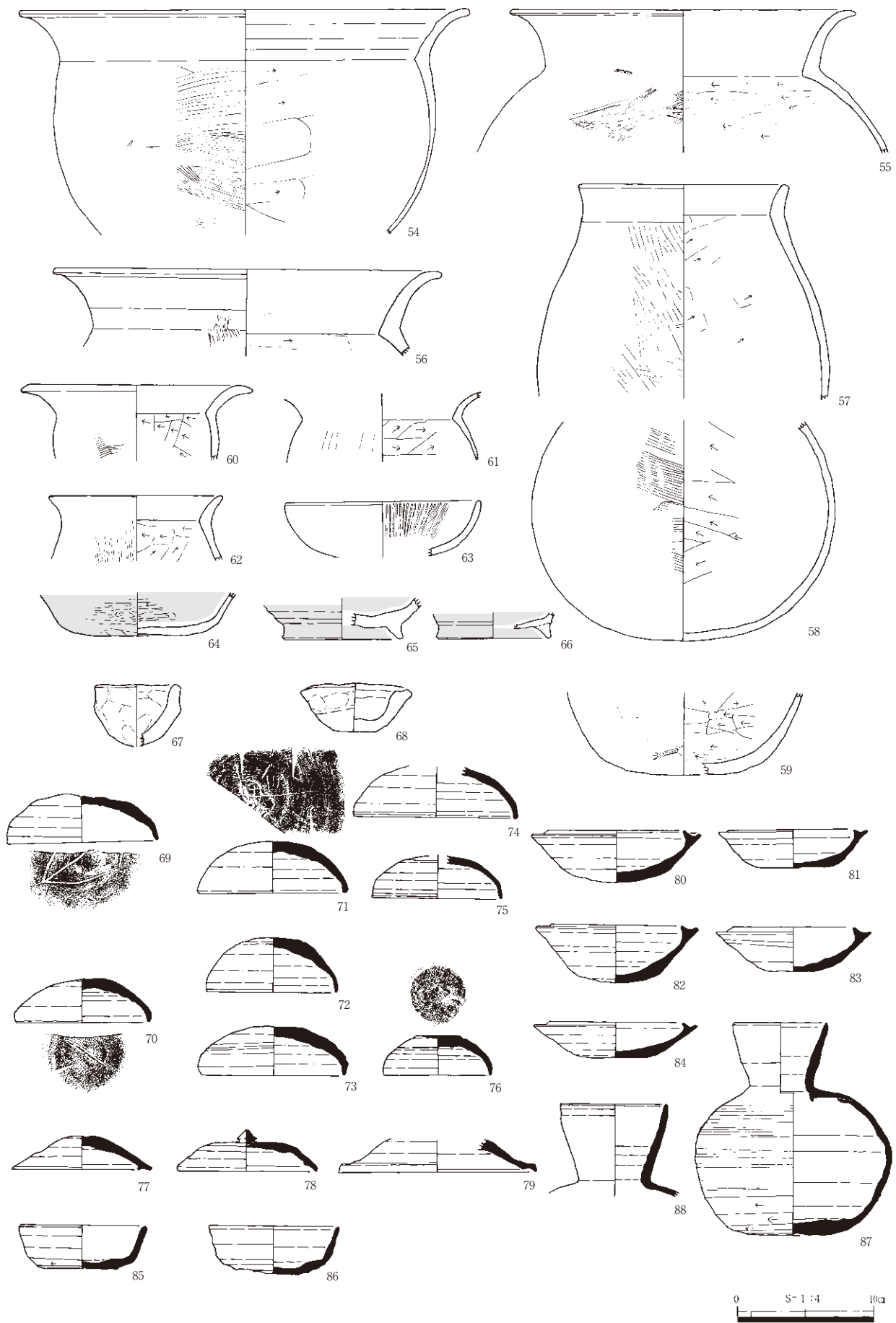
SS12の規模は、南北14m以上、東西4.4m以上、深さ最大1.0mを測る。東西も南東端が侵食により失われていることからすれば、本来はかなり広い平坦面が造られていた可能性がある。

調査区北壁面(A-A'断面)での堆積土は、畑地造作による盛土、旧表土層、遺構内堆積土に分かれていた。遺構内堆積土は、壁際から1 m程度は、地山の黄褐色粘土質シルトが塊となって崩れ落ちた状況であった。この他は、水平の堆積状況であった。堆積土層の下半部、床面近くには多量の土器片が含まれていた。

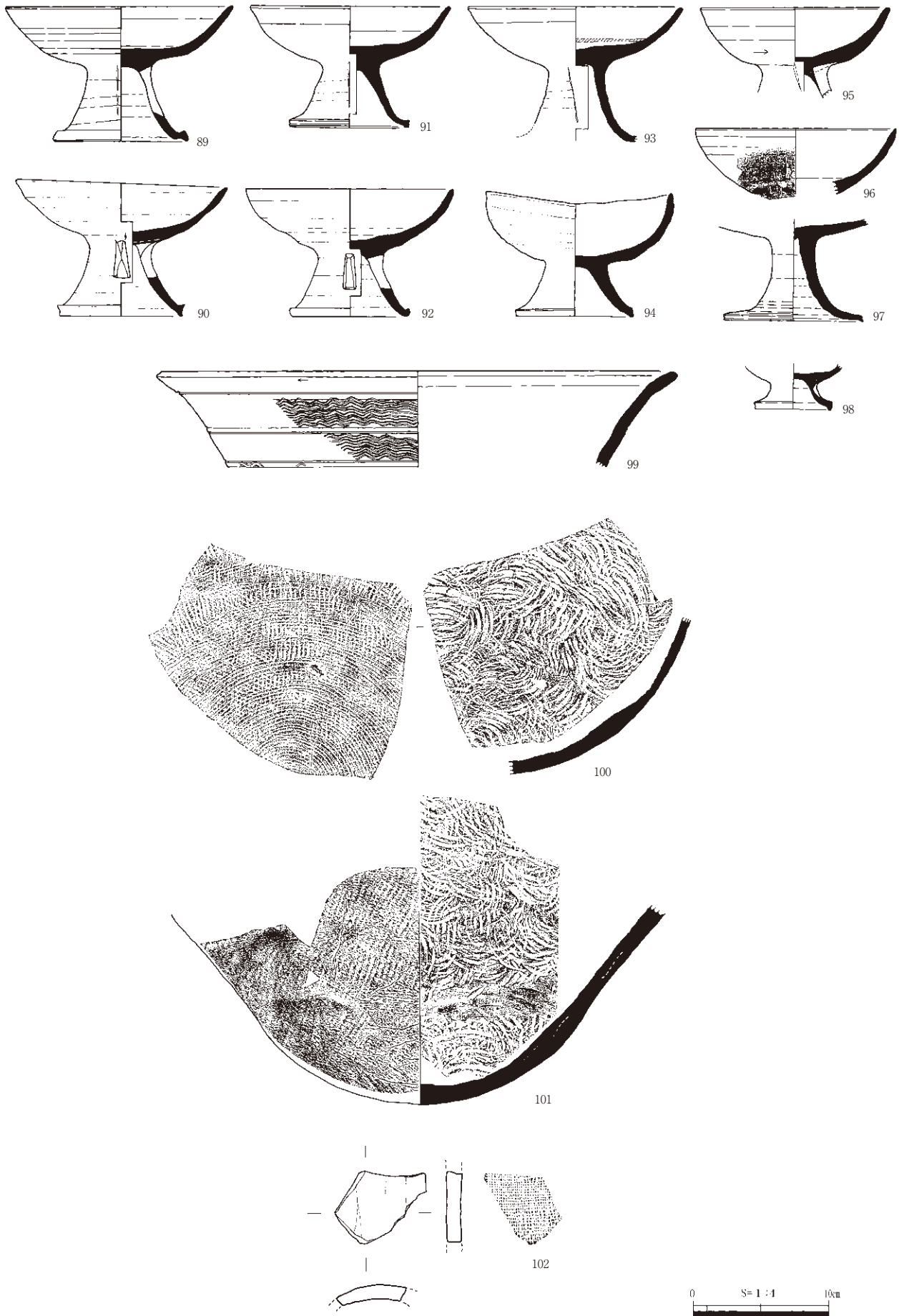
主軸線方向の土層(C-C'断面)は水平方向に堆積しているが、主軸線とこれに直交させた断面(B-B'断面)をみると、壁端から床面に向かって斜めに堆積していた。自然堆積と考える。また、南西壁近くに地山の黄褐色粘土質シルトの塊が堆積しており、壁の上部が崩落した状況と考える。北西壁が連続して波状に抉れていることは、この結果であろう。

床面は、貼床が施されている。17・26・33～35層による貼床が、SS14の西側周辺で施されている。最も厚いところで、10cm程度である。北半部と南半部は地山を床面としていた。北半部の地山は黄褐色粘土質シルトで、踏み締まりにより硬化していた。南部は粘土質シルトや砂礫層、黒褐色粘土質シルトで踏み締まりはそれほど顕著ではなかった。

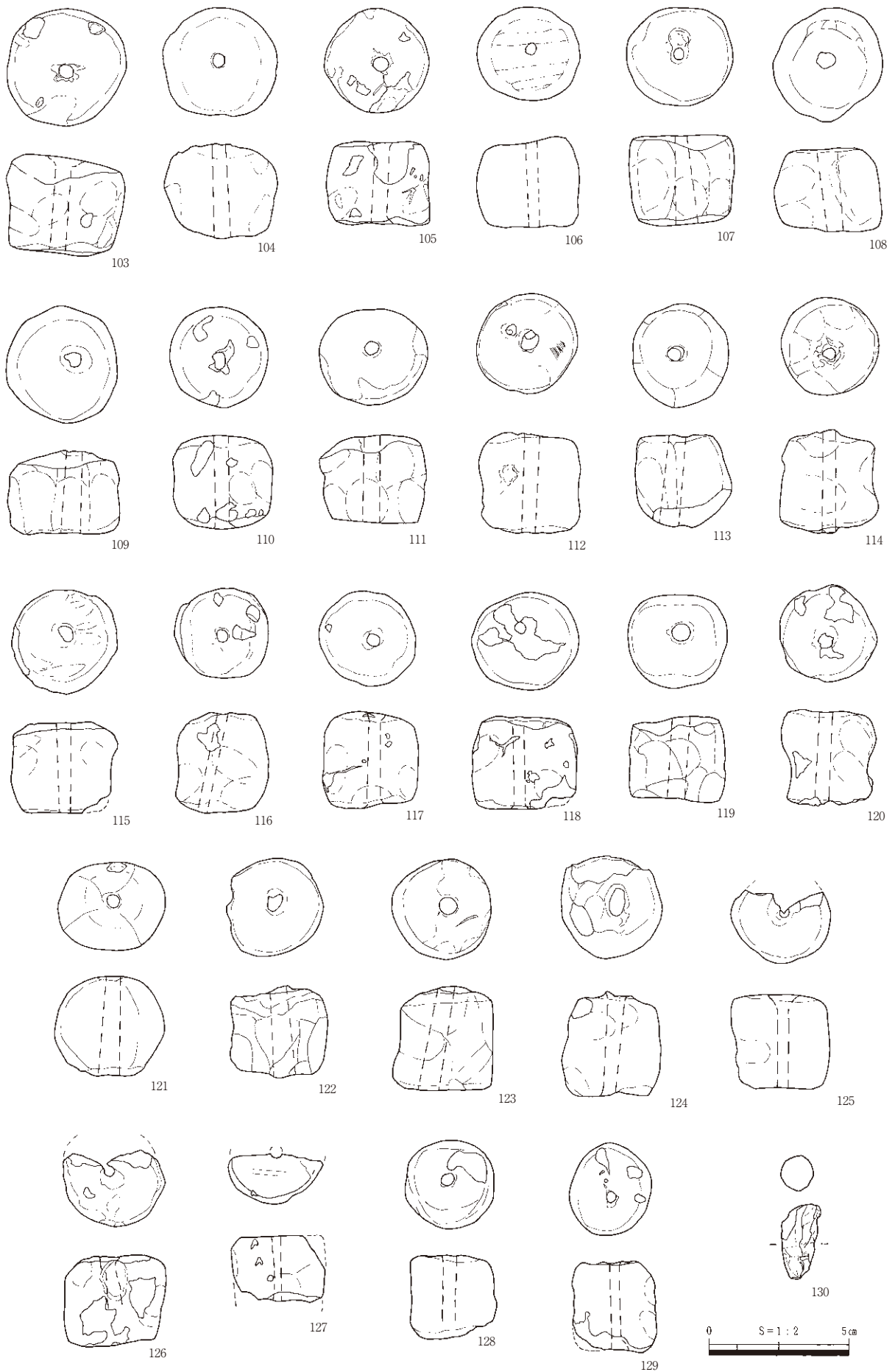
底面からは計9基のピットが検出された。攪乱下から検出したP1は比較的整った円筒形で、黒褐



第68図 SS12出土遺物(1)



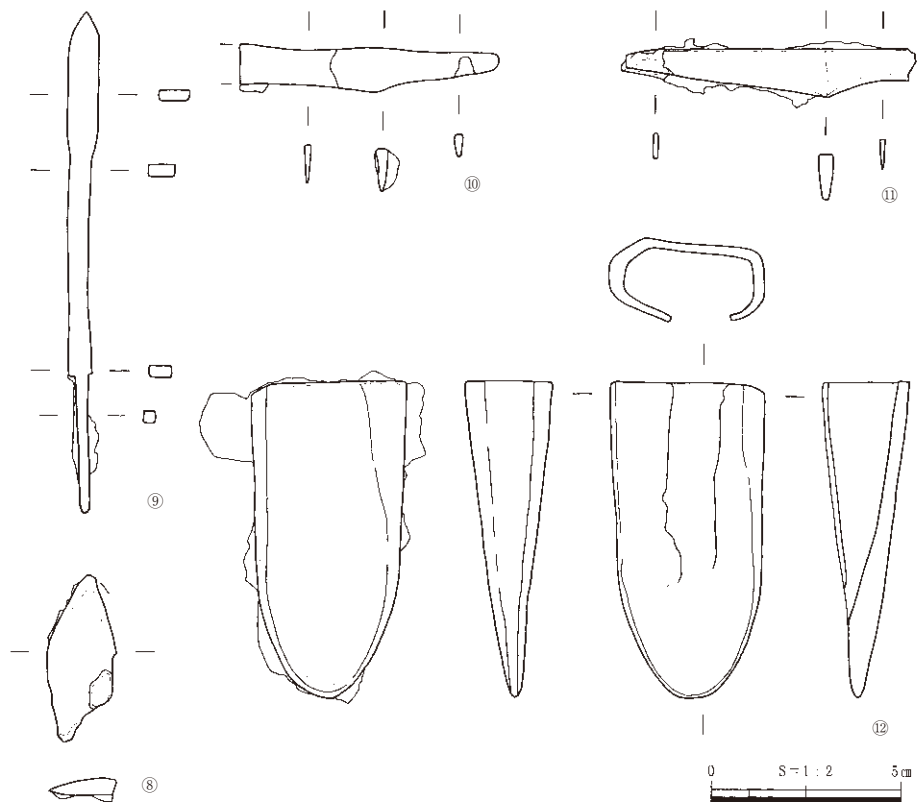
第69図 SS12出土遺物(2)



第70図 SS12出土遺物(3)

色土が堆積していた。最終段階では開口していた可能性もある。SS14の西側で検出したP 2は、粘土質シルトが詰まっていたことから、埋め戻されていたのであろう。P 3の堆積土は暗褐色シルトであった。攪乱穴の堆積土との区別は不明瞭であったが、穴の形状は明確であった。その他の小穴はSS12の堆積土に近似した土質であった。

P 3の西側に直径40cm程度の焼土面が検出された。わずかに表面が焼土化した程度である。焼土面は床面の上に形成され、下部構造はなかった。



第71図 SS12出土遺物(4)

なお、北東側はSS14とは重複する位置にあるが、両遺構の土層堆積が同時に進行していたことから、SS12とSS14は同時期に存在していた可能性を考える。

遺物は、北西隅付近の埋土中・底面付近から多量に出土している。図化したものには、土師器甕54～62、土師器碗63、土師器盤64、土師器高台坏65・66、手捏ね土器小鉢67・68、須恵器坏蓋69～79、須恵器坏身80～86、須恵器平瓶87、須恵器平瓶又は提瓶口縁部88、須恵器高坏89～98、須恵器甕99～101、丸瓦102、土錘103～129、土馬脚部130、鉄鏃⑧・⑨、刀子⑩・⑪、袋状鉄斧⑫がある。

土師器甕は口縁部が大きく外反するもので、大型のもの(54～59)と小型のもの(60～62)がある。57は、短く直立気味の口縁部をもつ。土師器碗・盤・高台坏は内外面に赤色塗彩が施される。

須恵器蓋坏は、坏H類と坏G類が供伴し、飛鳥時代ごろのものと考えられる。瓶類・高坏・甕も同時期と考えられる。須恵器蓋79は南側埋土中から出土し、かえりが消失する奈良時代ごろのものと考えられ、混入品と思われる。

丸瓦は、凸面ナデ、凹面布目が施されるもので、埋土上層から出土していることから、当遺構より上方の遺構から転落したと考える。

土錘については断面方形になるものが多い。紡錘車の可能性もあるが、斜方向に孔が穿たれるものがあることから、ここでは土錘として考えた。また、わずかに、祭祀関連遺物として土馬の脚部が出土した。

表8 SS12ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	72×60-47	
P 2	60×51-55	
P 3	56×53-54	
P 4	56×49-68	
P 5	41×36-22	
P 6	50×38-26	
P 7	39×32-22	
P 8	45×35△-22	
P 9	73×59-59	

第3章 調査成果

出土鉄器のうち、⑫は折り返しによる袋部をもち、刃部はよく使い込まれたもので、磨耗変形している。古代のものではなく、古墳時代に帰属する可能性がある。

遺構の時期は、出土遺物から飛鳥時代ごろと考えられる。なお、埋土中出土の炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $1,380 \pm 20BP$ という年代値を得た。暦年較正では7世紀中ごろから9世紀にかけてと考えられ、調査での所見と一致する。

他の段状遺構に比べて平坦面の規模が大きいのが、建物の痕跡はないことから、作業場的な性格を考える。

SS11(第72・73図、PL.18・42)

C区北東側のD11グリッドにあり、標高44.5～45.4mの急斜面に立地する。南側約3mには、古代の段状遺構SS15がある。また、南側は弥生時代中期の段状遺構SS17を掘り込む。町道敷設箇所でも検出したもので、遺存状態は非常に悪い。

検出した範囲は、南北1.6m、東西1.2mである。深さ最大0.44mを測る。北側及び東側は流失しているため全形は把握できず、かろうじて遺存していた不明瞭な平坦面があることで、段状遺構と判断した。

底面は水平ではなく東側に傾斜する。平坦面では建物等の施設は確認されなかった。

埋土は3層に分層できた。1・2層は腐食土層、3層は流入土と考える。

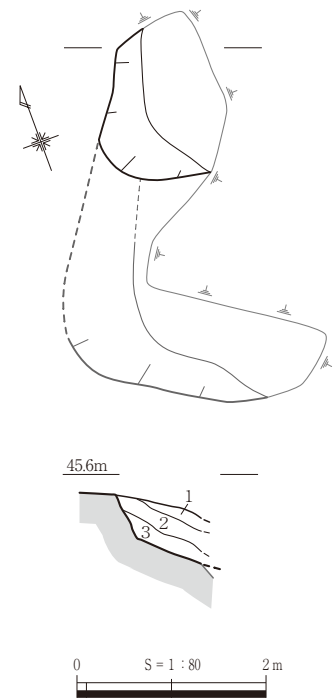
遺物は、埋土中から出土した弥生土器底部131、土師器高台坏132、須恵器坏蓋133を図化した。131は弥生時代中期のものと考えられ、切り合うSS17からの混入遺物と考えられる。132は高台坏の破片で、内外面に赤色塗彩が施される。133はかえりが消失する直前の形態である。

出土遺物から、飛鳥時代ごろの段状遺構と考えられる。

SS13(第74・75図、PL.19・42・43、巻頭図版4)

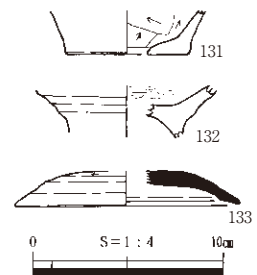
C区東側のD・E10グリッドにあり、標高40.7～42.3mの急斜面に立地する。北東側約3mにはSS12がある。ソフトローム二次堆積土中で検出した。

形状は、急斜面ゆえの土砂の流出や動植物による攪乱作用等により必ずしも原形をとどめているとは言えないが、掘方部分は歪な方形もしくは多角形と考えられる。床面は南部分が攪乱によって失われているものの五角形に近い形状をなしていたものと推測される。規模は掘方部分が長軸(南北方向)で4.63m、短軸(東西方向)で4.02m、掘方最上部から床面までの深さは1.07mを測る。底面の現存値

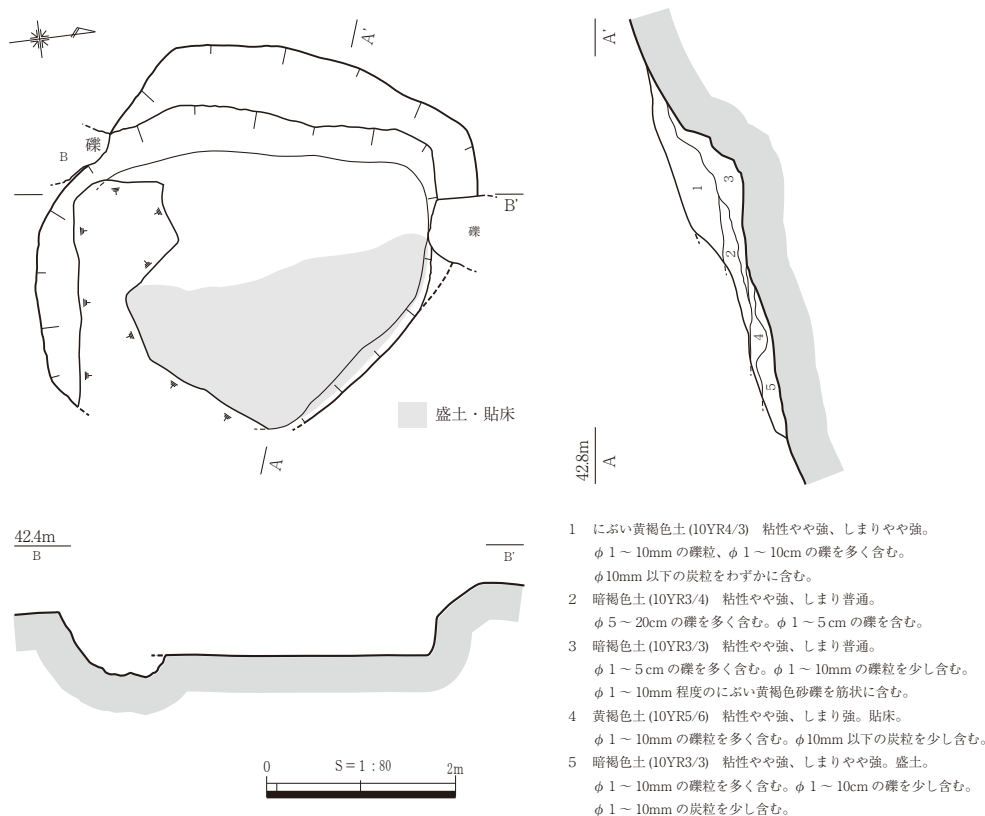


- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや強。しまり普通。φ1～10mmの礫粒を少し含む。φ1～5cm程度の礫を多く含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱。しまり弱。φ1～10mmの礫粒を少し含む。φ1～5cm程度の礫を多く含む。φ2～3mm程度の炭粒をわずかに含む。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性強。しまりやや強。φ1～10mm程度の礫粒をわずかに含む。φ1～3cm程度の礫を含む。

第72図 SS11



第73図 SS11出土遺物



第74図 SS13

は、長軸(南北方向)で3.20m、短軸(東西方向)で2.86mである。

床面は概ね東半部に4・5層による盛土・貼床が施されていたことから、本遺構は、斜面を掘削して水平な床面を造りつつ斜面下方側に向けて掘削土を盛り、貼床をして床面積を広げたことがわかる。床面や遺構周辺では、建物等は確認できなかった。

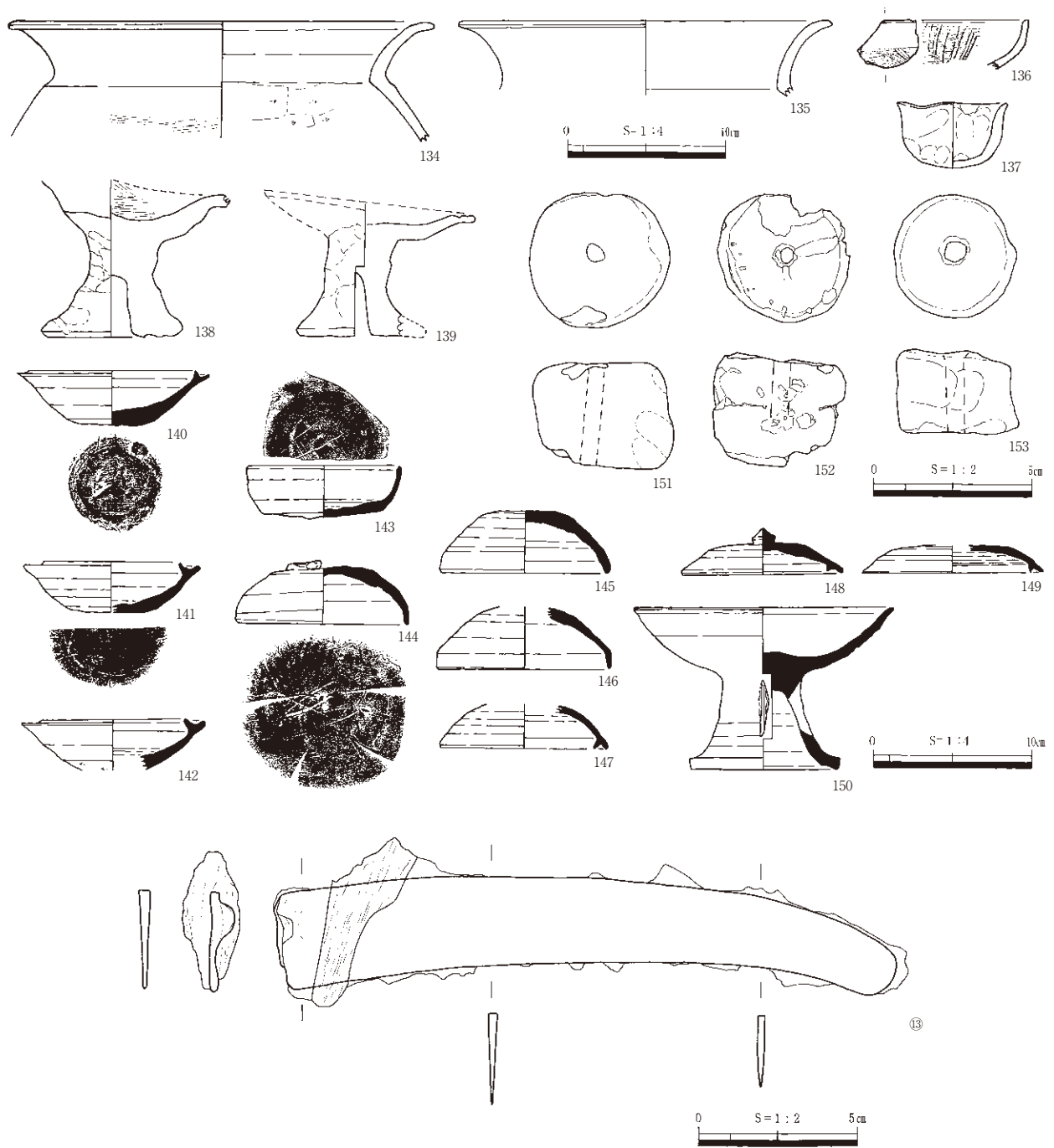
埋土は大きく3層に分けられる。1層はにおい黄褐色土、2・3層は暗褐色土で、いずれも地山礫を多く含むややシルト質の粘性土である。自然堆積と考えられる。4・5層は本遺構を構築する際に施された貼床と盛土である。

図化した遺物は、埋土中から出土した土師器甕134、土師器碗136、土師器手捏ね高坏138・139、須恵器坏身140~142、須恵器坏蓋144~146・148、須恵器高坏150、土錘151~153の他、貼床中から出土した手捏ね小鉢137、須恵器坏身143、須恵器坏蓋147、鉄鎌⑬がある。土師器甕は口縁部が薄手の造りで大きく外反するものである。須恵器蓋坏は、坏H類が非常に小型化するものと坏G類が共伴する。他の遺構では見られない実用品とは考えにくい土師器手捏ね高坏や手捏ね小鉢があり、祭祀的な様相も窺える。⑬はほぼ完形で、刃部はゆるく湾曲し、基部は小さく折り返し、柄は鈍角に付く。

遺構の時期は、出土遺物から飛鳥時代ごろと考えられる。同時期に密集して作られた段状遺構群の一角を構成すると考えられるが、規模が小さく、祭祀的な遺物も出土することから、何らかの祭祀関連遺構と考えられる。

SS14・SB4(第76・77図、表9、PL.19・20・42・44)

C区北東側のC・D9グリッドにあり、標高40.1~41.0mの急斜面に立地する。東側約4mには



第75図 SS13出土遺物

SS16があり、北西側はSS12と重複する。また、北側にはSA 1がある。

東側は流失しており、全形は明確ではないが、平面は長方形を呈し、南北6.8m、東西は3.1m以上、深さ最大0.66mを測る。長軸方向は、N-40° -Eである。ほぼ斜面の等高線に平行する向きである。遺存する床面の北東辺に焼土面があること、P10を南東柱穴とすれば、平面形は方形に復元される。

壁は、床面から70° 前後の角度で立ち上がっていた。壁面の北半部は地山の黄褐色粘土質シルト、南半部の下半部は褐色シルトで凝灰岩の亜角礫を多量に含んでいる。北西壁の南半部では、周溝から続いて、高さ25cm、奥行10cm程度、断面形が半楕円形の抉り込みが造られていた。この造作は北半部にも続いてしたが、次第に押しつぶされたように変形して、北端では薄く遺る痕跡を確認したにすぎない。人為的な施設であろうが、性格は不明である。北東壁や南西壁には、この造作はなかった。壁

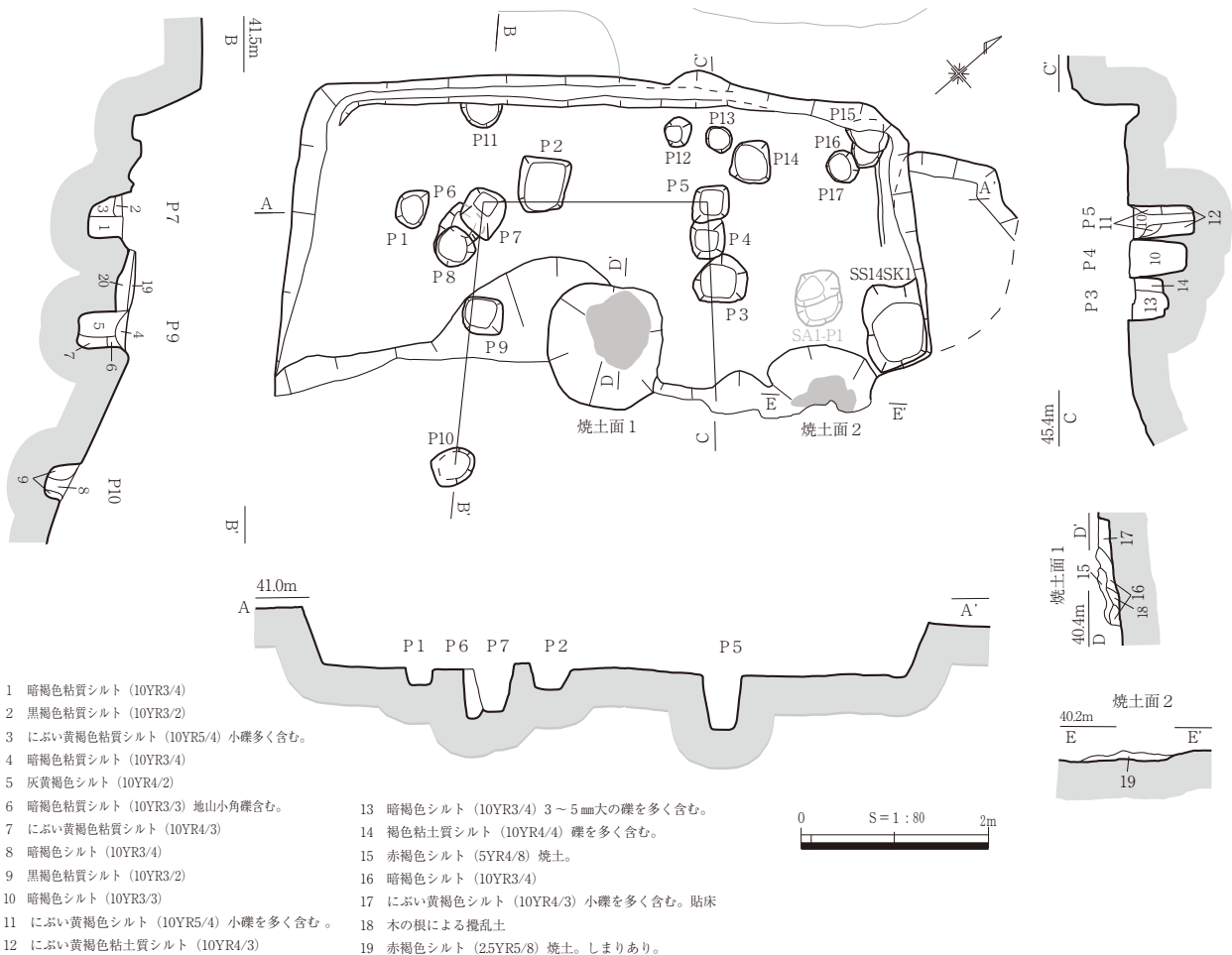
溝は幅0.2m、深さ0.1m前後で北西壁の南端から北東壁に続いていた。北西壁では明確に造られていたが、北東壁では、2m程で造作は不明瞭になっていた。

床面には、中央部に桁行2間(2.8m)、梁行1間(2.4m)程度の掘立柱建物跡SB4が建てられていた。重複するP3・4・5とP6・7・8はそれぞれ対応する柱穴である。P4とP6の組み合わせが最も古く、次いでP3とP8、最も新しいものがP5とP7である。P10は、柱穴の組み合わせ方向と側壁の対応関係からみて、最も新しい主柱穴の組み合わせであろう。P5-P7、P7-P9、P9-P10間の柱穴間はそれぞれ2.4m、1.1m、1.7mである。柱穴の平面形は隅丸方形で一辺0.40m前後、深さは0.4~0.6mである。柱痕は円形で、直径20cm程度である。比較的深く、しっかりとした柱穴である。南側桁筋上にはP9があるが、北側桁筋には対応する柱穴を検出することは出来なかった。

この他の小穴は北西壁近くに配置されていた。

表9 SS14ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	40×34-13	
P 2	56×51-14	
P 3	57×51-41	SB4主柱穴
P 4	40△×37-53	SB4主柱穴
P 5	37×37-62	SB4主柱穴
P 6	41×36-54	SB4主柱穴
P 7	46×45-49	SB4主柱穴
P 8	40×39-60	SB4主柱穴
P 9	43×40-64	SB4主柱穴
P 10	46×37-30	SB4主柱穴
P 11	45×25-9	
P 12	30×27-5	
P 13	28×28-5	
P 14	45×40-7	
P 15	40×25-10	
P 16	31△×20-4	
P 17	35×30-17	



第76図 SS14

第3章 調査成果

平面形は矩形や円形で、深さは0.1m程度、大きさは直径0.2m程度である。浅い落ち込みである。北西隅では3基重複していた。小穴の用途は、限定することはできなかった。また北東壁の東端に接して、長さ1m、幅0.6m、深さ0.1m程度の方形の土坑(SS14 SK1)が造られていた。いわゆる貯蔵穴と近似した特徴であるが、浅い点が気になる。

焼土面1は床面の中央に設けられている。この付近の床面は浅く凹み、特に焼土面の周辺は、さらに長径1.2m、短径1mの楕円形に凹んでいた。焼土面は、木根等による著しい攪乱を受けていたが、焼土層は最も厚い中央部で、10cm以上遺存していた。焼土面2は、北東壁近くにあり、やはり浅く凹んだ床面のなかに造られていた。焼土面は木根等による攪乱で、不定形に変形していた。

床面は南半部と北半部で大きく異なっていた。南半部は褐色シルトの地山がそのまま硬く踏み締まった状態であった。これに対して北半部は、地山のうえに黄褐色粘土質シルトで厚さ10cm程度の貼床が施されていた。南半部と同じく硬く踏み締まっている。

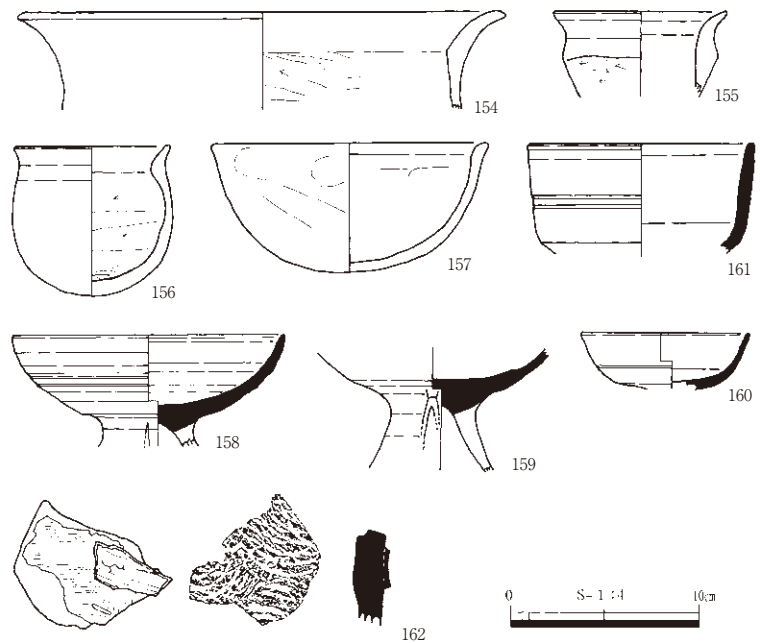
堆積土は、大きく3層に分かれていた。段丘斜面の上方が厚く、下方に向かって形成された自然堆積である。SS12と重複する位置にあり、明確ではないが、ほぼ同時に埋積したような状況が土層断面から窺えることから、SS12と並存していた可能性もある。

遺物は、北側底面上で土師器壺157が伏せられた状態で出土した。その他はいずれも埋土中からの出土であり、土師器甕154、小型碗155・156、須恵器高坏158~160、須恵器碗161、溶着した須恵器甕片162を図化した。157は深い大型の塚である。154は大きく外反する口縁部をもつ。

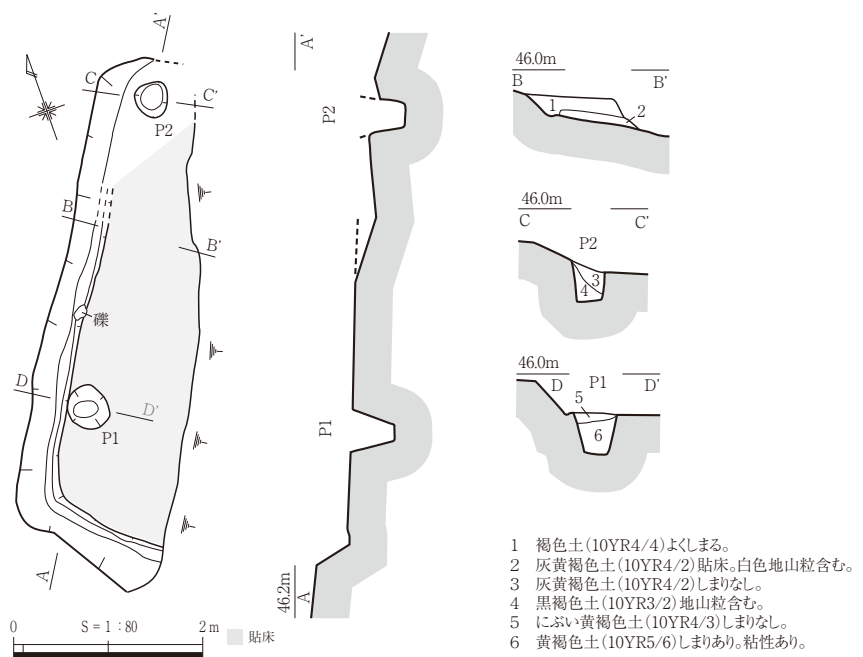
出土遺物から、SS14・SB4はTK46・48併行期、飛鳥時代ごろの遺構と考えられる。

SS15(第78図、表10、PL.21)

C区中央やや北寄りのE11



第77図 SS14出土遺物



- 1 褐色土(10YR4/4)よくしまる。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)貼床。白色地山粒含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2)しまりなし。
- 4 黒褐色土(10YR3/2)地山粒含む。
- 5 にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまりなし。
- 6 黄褐色土(10YR5/6)しまりあり。粘性あり。

第78図 SS15

グリッドにあり、標高45.4~45.8mの斜面に立地する。北側約3mには、飛鳥時代の段状遺構SS11がある。町道敷設部分で検出したため、上半は削平され東側は流失しており、遺存状態は悪い。ハードローム層中で検出した。

平面は長方形を呈すと考えられ、南北5.3m以上、東西1.7m以上、深さ最大0.28mを測る。平坦面には2層による貼床がほぼ全面に施されたと考えられる。壁際には幅10~20cm、深さ3~7cmを測る溝が巡る。西側壁際でピット2基を検出した。柱痕は確認できなかったが、ほぼ同規模で柱穴となる可能性が高く、掘立柱建物が建てられていたと考えられる。柱穴間距離は3.3mである。

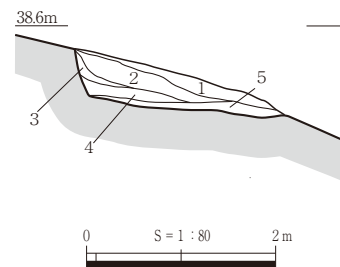
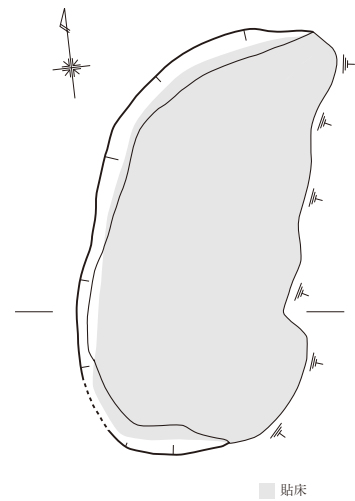
埋土は褐色土の単層である。

埋土中から土師器甕片が出土したが、図化できなかった。

遺構の時期は、出土遺物やその他の遺構の状況から、飛鳥時代から平安時代ごろと考えられ、平坦面に掘立柱建物をもつ段状遺構である。なお、埋土中出土の炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を行った結果、補正年代値で980±20BP.という年代値を得た。暦年較正では10世紀末から12世紀中ごろとされ、出土遺物の所見より新しい年代値と考える。

表10 SS15ピット一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	48×42-44	
P 2	37×35-43	



- 1 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや強。しまりふつう。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし。しまりふつう。地山礫・炭化物粒・焼土粒わずかに含む。
- 3 におい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや強。しまりふつう。地山ブロック・焼土粒・炭化物粒わずかに含む。
- 4 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強。よく締まる。地山礫・炭化物粒わずかに含む。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強。よく締まる。φ1~5mm程度の炭粒・焼土粒を少し含む。φ1~3cm程度の地山黄褐色ブロックを少し含む。φ1~5cm程度の礫を含む。貼床。

SS16(第79・80図、PL.21・22・42)

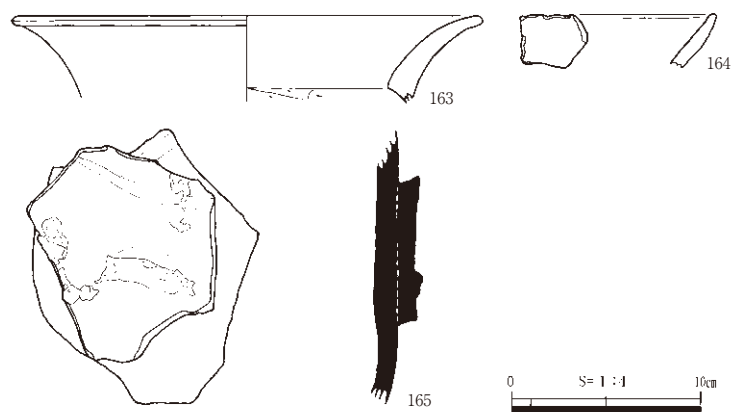
C区北東側のC・D 8グリッドにあり、標高37.7~38.5mの急斜面に立地する。西側約4mには飛鳥時代の段状遺構SS14がある。谷堆積の褐色土中で検出した。

東側は流失しており全形は把握しがたいが、平面楕円形を呈し、南北4.7m、東西2.2m、深さ最大0.62mを測る。全面に亘って5層による貼床が施されている。平坦面上には、建物等の施設は検出されなかった。

埋土は4層に分層でき、いずれも斜面上方からの自然堆積層と考えられる。

遺物は、埋土下層中から土師器甕163、埋土中から土師器坏164、埋土上層中から溶着した須恵器甕片165が出土している。163は口縁部が大きく外反する。164は内外面に赤色塗彩が施される。165は

第79図 SS16



第80図 SS16出土遺物

須恵器窯関連遺物で、須恵器甕片が外面同士で溶着する。

本遺構は出土遺物から、飛鳥時代ごろと考えられる。SS13同様に他の段状遺構に比べて規模が小さいので、建物以外のために加工された段と考える。

3 土坑・製炭土坑

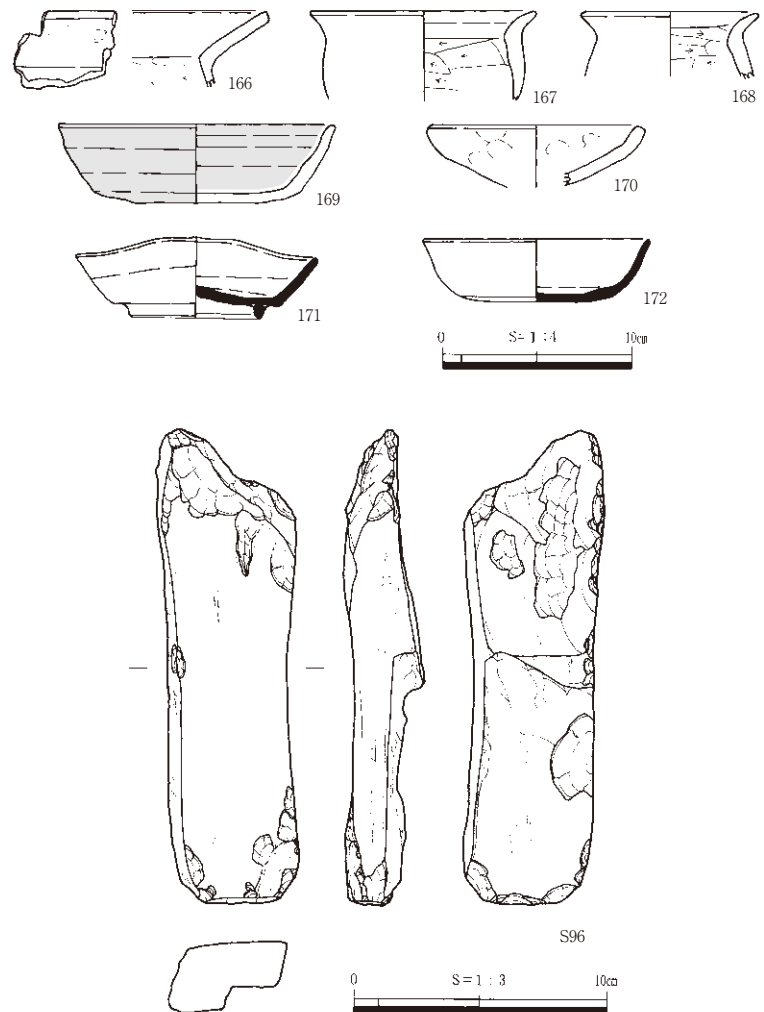
SK 1 (第81・82図、PL.22・41・77)

A区中央のF 4グリッド南西隅からG 4グリッドの北西隅にかけてあり、標高40.5~41.0m程度の丘陵斜面上に立地する。西側に接してSK11がある。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

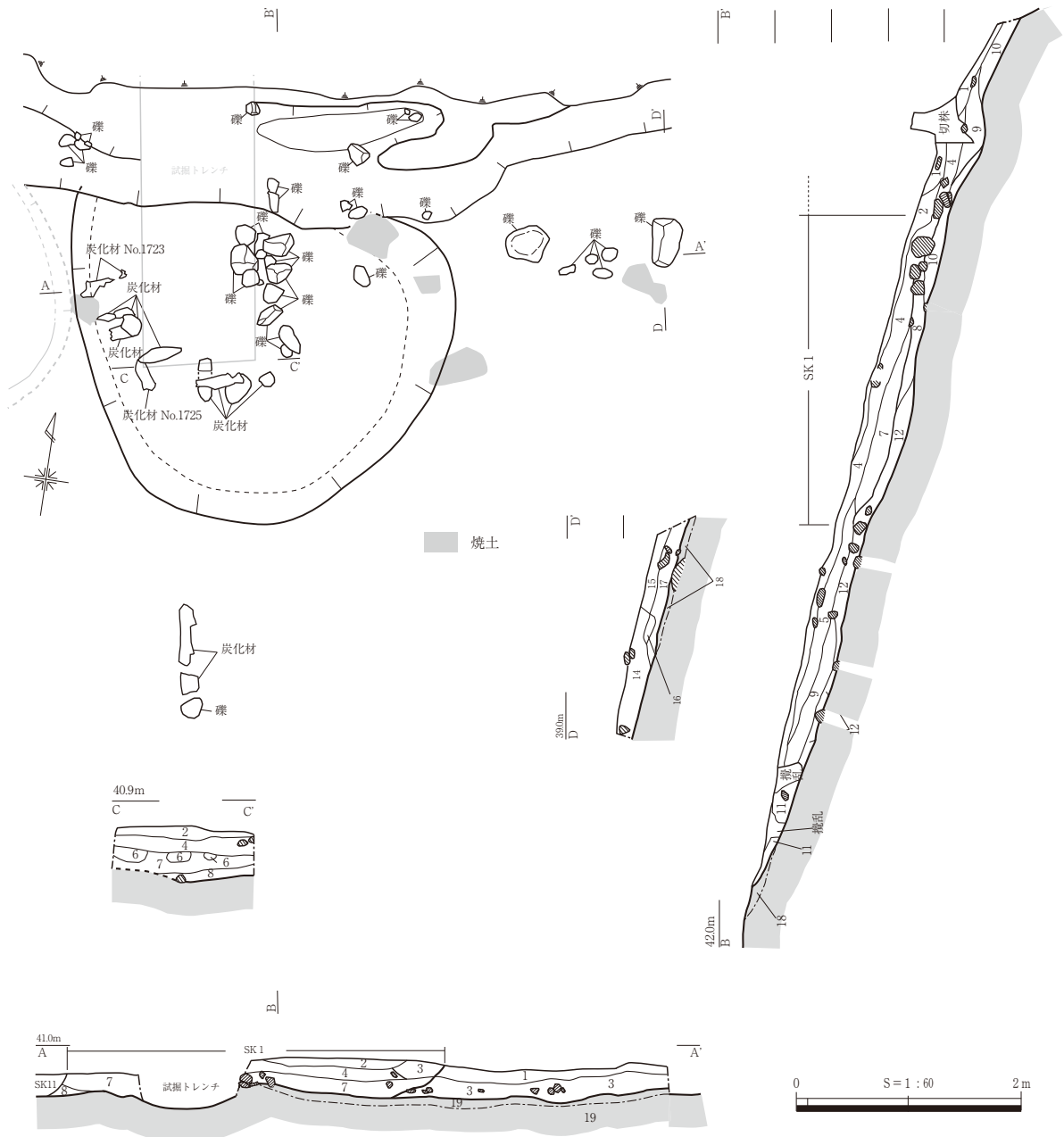
検出面において、幅30cm程度の帯状または円形状の焼土ブロックを確認し、その外側の円周ラインを遺構の範囲と考えたが、掘削の際には、埋土と黒褐色土を主体とする自然堆積との判別が難しく、掘方は確認できなかった。また、後述するように、SK 2とSK11で検出したような掘方底面付近の地山の掘り込みは明瞭ではなかった。

平面形は、不整な円形を呈しており、長さは長軸(東西方向)が3.32m、短軸(南北方向)が2.78m以上、検出面からの深さが最大で33cmを測る。底面の規模は明瞭ではないが、埋土観察から、推定で長軸が2.70m程度、短軸が2.50m程度を測る。SK 1のすぐ北側では、東西方向に延びる長さ1.70m以上、幅0.46m程度の溝状の掘り込みを確認しており、SK 1の土坑と関連する遺構と考える。

埋土は、2~4・7層が相当し、4層に分けられる。2・4層には、炭粒や焼土粒を含んでおり、4層でやや密に含む。3層は検出面で確認できた焼土ブロックである。7層は黒褐色土であるが、炭粒や焼土粒は含んでいなかった。SK 1の北側溝の埋土である9層は、黒褐色土で焼土粒を多く含んでいた。また、土坑外の南側に4層が延びるほか、5層や9層には炭化材や焼土粒を含んでおり、東側の14~17層には炭や焼土粒、焼土ブロックを含んでいた。これらは、SK 1から流出した埋土と考える。SK11と切り合い関係にあり、SK 1→SK11の順序で築かれたことを確認した。なお、出土した炭化材5点について樹種同定を行ったところ、すべてコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。



第81図 SK 1 出土遺物



- | | | | | |
|--|--------------|---|--------------|--|
| <p>1 黒褐色土 (10YR2/3) しまりやや強、粘性なし。粗砂、φ2-3mmの砂礫を多く含む。表土。</p> <p>2 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱、粘性弱。細砂・ローム粒、炭粒・焼土粒を少量含む。</p> <p>3 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性ともに弱。焼土ブロック。炭粒を少量含む。</p> <p>4 黒褐色土 (10YR2/2) しまり弱、粘性なし。炭粒・焼土粒をやや密に含む。</p> <p>5 黒色土 (10YR1.7/1) しまりやや弱、粘性弱。粗砂・ローム粒、炭粒を多く含む。</p> <p>6 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性ともにやや弱。焼土ブロック。</p> <p>7 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや弱、粘性弱。細砂・ローム粒を多く含む。</p> | <p>SK1埋土</p> | <p>8 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性ともにやや強。黒褐色土と地山ロームの混濁土。</p> <p>9 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性ともにやや強。細砂・地山ローム粒、焼土粒を多く含む。溝埋土。</p> <p>10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり・粘性ともにやや強。黒褐色土と地山ロームの混濁土。</p> <p>11 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり・粘性ともにやや強。黒色土 (5層)と地山ロームの混濁土。炭粒を多く含む。</p> <p>12 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) しまりやや強、粘性強。黒褐色土と地山ロームの混濁土。</p> <p>13 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまり・粘性ともにやや強。ローム再堆積土 (基盤層)。</p> <p>14 暗褐色土 (10YR4/3) しまり・粘性ともにやや強。φ2-3mmの砂礫・ローム粒、焼土粒を多く含む。</p> | <p>SK1埋土</p> | <p>15 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱、粘性弱。粗砂・ローム粒、焼土粒・炭片を多く含む。</p> <p>16 明褐色土 (10YR5/6) しまり弱、粘性なし。炭片を含む。焼土ブロック。</p> <p>17 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや弱、粘性弱。粗砂・ローム粒、焼土粒を多く含む。炭片・炭塊を含む。</p> <p>18 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまり・粘性ともにやや強。黒褐色土と地山ロームの混濁土。19層と同質 (基盤層)。</p> <p>19 黒褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性ともに強。黒褐色土と地山ロームの混濁土。18層と同質、SK2の4層と同一層 (基盤層)。</p> |
|--|--------------|---|--------------|--|

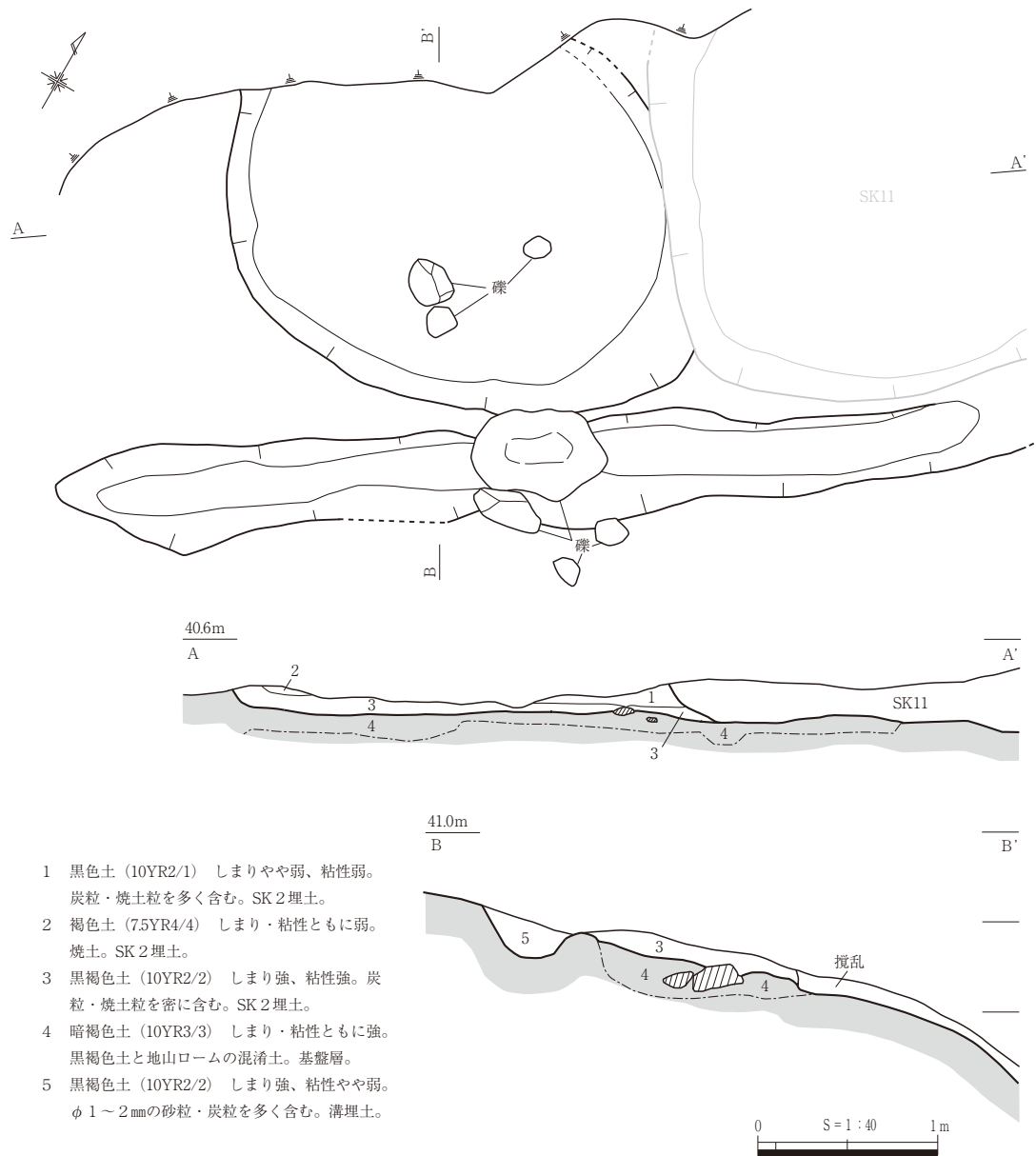
第82図 SK1

第3章 調査成果

遺物は、埋土中から須恵器や土師器、石器が出土した。図化したものは、土師器甕166~168、土師器埴169、焼塩土器と考えられる170、須恵器高台埴171、須恵器埴172、流紋岩質凝灰岩製砥石 S 96 である。166は口縁部が薄手で大きく外傾する。167・168は小型の甕である。169は、内外面に赤色塗彩が施される。170は浅い皿状の製塩土器(焼塩土器)と考えられ、外面の二次的被熱による風化が著しい。171は焼成時に変形したもので、八峠編年奈良後期から平安初期ごろのものと考えられる。172は埴状の体部をもつ。S 3 は不整な撥形を呈すもので、全面よく使用され湾曲する。

検出面や埋土中から出土した炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代値で $1,010 \pm 20BP.$ 、 $970 \pm 20BP.$ の数値が得られた。暦年較正では10世紀末から11世紀中ごろとされたことから、出土遺物の示す時期よりやや新しい時期と考える。

埋土中に炭粒や焼土粒が多く含まれることから、製炭土坑と考える。



第83図 SK2

SK 2 (第83・84図、PL.22・41)

A区中央のG5グリッドの北東隅付近にあり、検出面での標高40.5m付近の丘陵斜面上に位置する。北東側に接してSK11がある。すぐ北側にはSS1があるため、遺構より北側の斜面は削られており、それにともない遺構の北西隅も壊されていた。表土除去後のソフトローム二次堆積土中で検出した。

検出の際、遺構の北側から北西側にかけて、幅30cm程度の帯状もしくは円形状の焼土ブロックを確認しており、その外側の円周ラインを遺構の範囲と認識した。底面付近では地山を掘り込むことから、遺構の掘方を確認できたが、検出面から底面付近にかけては、埋土との識別が困難であり、掘方を確認できなかった。

平面形が不整円形を呈する土坑で、長軸(南西-北東方向)が2.40m、短軸(南東-北西方向)が1.78m以上、検出面からの深さが最大で0.35mを測る。底面は北西方向にやや傾斜し、長軸が2.24m、短軸が1.64m以上、底面積が2.9㎡程度となる。また、SK2の南東側に接して、南西-北東方向に延びる、長さが5.4m以上、幅が0.41~0.62mで、深さが0.2m程度を測る溝状遺構を検出した。埋土は黒褐色土の単層であり、SK2埋土(3層)と同質であることや、炭粒を多く含むことから、SK2と一連の遺構の可能性が高い。

埋土は、3層からなり、炭粒や焼土粒を密に含む黒褐色土(3層)を主体とする。2層は焼土であり、1層と同質である。埋土観察から、SK11と切り合い関係にあり、SK2→SK11の順で築かれたことを確認した。なお、出土した炭化材5点について樹種同定を行ったところ、3点がコナラ属コナラ亜属クヌギ節、2点がコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。

遺物は、埋土中から土器が出土した。図化したものは、口縁部が薄手で大きく外傾する土師器甕173である。

出土遺物や埋土の状況はSK1と大差なく、時期は平安時代ごろと考える。検出面や埋土中から出土した炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代値で1,010±20BP.、1,020±20BP.という数値が得られた。暦年較正によると10世紀末から11世紀初頭と考えられ、調査の所見とほぼ見合う年代値と考える。

埋土中に炭粒や焼土粒が多く含まれることから、製炭土坑と考える。

SK 8 (第85図、PL.23)

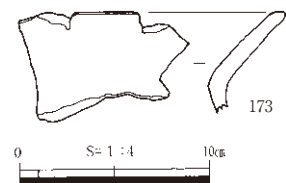
C区北東側のD10グリッドにあり、標高42.6~42.9mの急斜面に立地する。東側約1m斜面下方にはSS13がある。

平面は不整長楕円形を呈し、長軸1.42m、短軸0.9m、深さ最大0.62mを測る。断面は逆台形状を呈し、底面は凹凸がある。

埋土は3層に分層できた。1・2層は地山礫を含む暗褐色土系、3層は地山礫を含む黄褐色土系のものである。

埋土中から土器片が出土しており、小片のため図化できなかったが、古代の土師器片と考えられる。

詳細な時期は不明であるが、出土遺物や周辺の遺構の状況から、飛鳥時代から奈良時代と考えられる。性格は不明である。



第84図 SK2出土遺物

SK11(第86・87図、PL.22・41)

A区中央のG4グリッドの北西隅からG5グリッドの北東隅にかけてあり、検出面での標高が40.0~40.5m付近の丘陵斜面上に立地する。南西側に接してSK2がある。SK2と同様、すぐ北側にはSS1があるため、遺構より北側の斜面は削られており、それに伴い遺構の北西隅も壊されていた。表土除去後のソフトローム二次堆積層中で検出した。

検出の際、遺構の北東側と南西側において、幅30cm程度の帯状の焼土ブロックを確認し、SK2と同様、円形状になると推定できることから、その外側の円周ラインを遺構の範囲と認識した。底面付近では地山を掘り込むことから、遺構の掘方を確認できたが、検出面から底面付近にかけては、埋土との識別が困難であり、掘方の確認ができなかった。

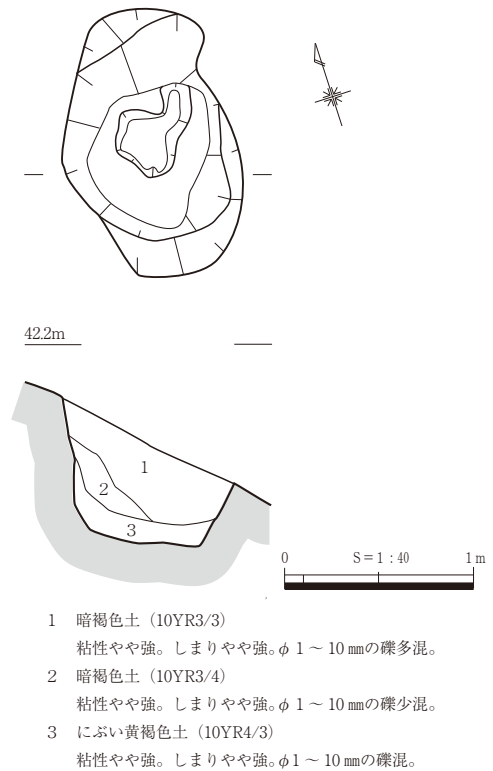
平面形が不整な円形を呈する土坑で、長軸(南西-北東方向)が復元で2.74m、短軸(北西-南東方向)が2.18m以上、検出面からの深さが最大で0.4mを測る。底面は北西方向にやや傾斜し、長軸が2.44m、短軸が2.06m以上、底面積が4.7㎡程度となる。SK2の南東側で確認した溝状遺構は、SK11の中央より北東側では途切れており、SK11との関連性は不明である。

埋土は黒色土または黒褐色土を主体とする4層からなり、2・4層で炭粒を多く含んでいた。3層は焼土ブロックである。5層と同質の層は南東側の斜面上方にも延びており、埋土5層との識別が不明瞭である。埋土観察から、SK1およびSK2を壊して築かれることから、SK1・SK2→SK11の順で築造されたと考える。なお、出土した炭化材4点について樹種同定を行ったところ、2点がコナラ属コナラ亜属コナラ節、2点がコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。

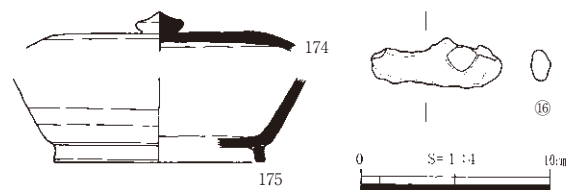
遺物は、埋土中から土器と鉄滓が出土した。図化したものは、須恵器坏蓋174、須恵器高台坏175、流動滓⑯である。174は宝珠つまみをもつ。175は直線状に開く体部をもち、八峠編年平安I前期ごろのものと考えられる。

出土遺物や埋土の状況からSK1やSK2にやや後出する平安時代中期ごろと考える。また、検出面や埋土中から出土した炭化物について、AMSによる放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代値で1,010±20BP.、1,020±20BP.、960±20BP.という数値が得られた。暦年較正では10世紀末から12世紀中ごろと考えられ、調査の所見とほぼ見合う年代値と考える。

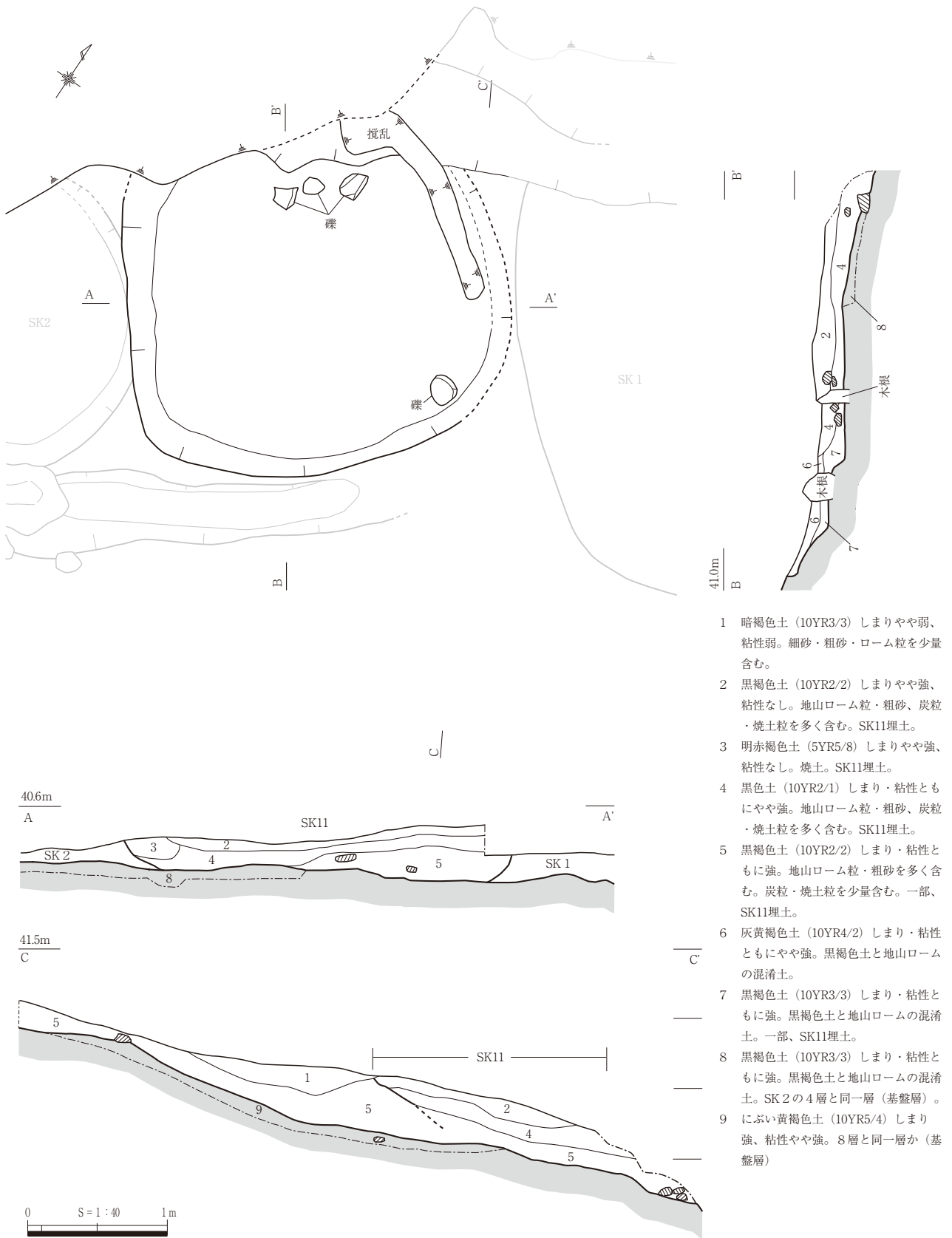
埋土中に炭粒や焼土粒が多く含まれることから、製炭土坑と考える。



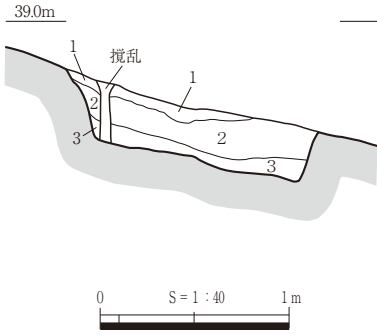
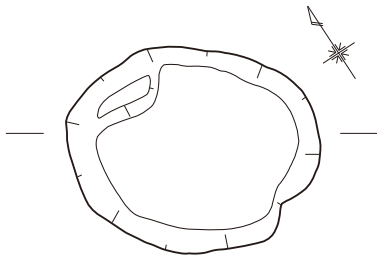
第85図 SK8



第86図 SK11出土遺物



第87図 SK11



- 1 にぶい黄褐色粘土質シルト (10YR4/3)
- 2 褐色粘土質シルト (10YR4/4)
凝灰岩の小礫を多く含む。
- 3 暗褐色粘土質シルト (10YR3/4)
しまり有り。均一。

第88図 SK15

4 柵列

SA 1 (第89・90図、表11)

C区北東側のC 8・9グリッドにあり、標高40.2~40.5mの斜面部に立地する。SS14と重複しているが、周辺の斜面上にも対応する柱穴は確認されなかったため、柵列と判断した。

3基の柱穴からなり、長さ2.7m以上を測る。柱穴の平面形は矩形を基本にし、一辺0.5m、深さ0.5m程度である。柱穴間距離は、P 1 - P 2間で1.75m、P 2 - P 3間が0.95mである。

柱痕は暗褐色シルト、柱裏込め土は黄褐色粘土質シルトであった。

遺物はP 1内から宝珠状つまみをもち、かえりが退化した須恵器坏蓋の完形品176、P 2内から刀子⑭が

SK15(第88図、PL.23)

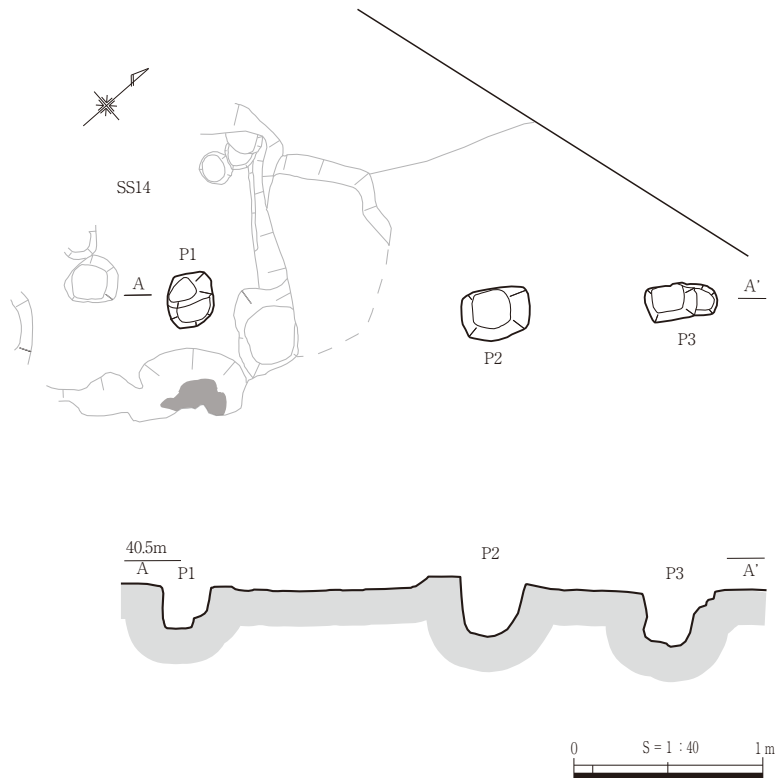
C区北東のD 9グリッドにあり、標高38.4~38.6mの斜面上に立地する。灰黄色粘土質シルトを検出面として確認した。周辺には7世紀代の段状遺構や柱穴が分布している。西側にSS14がある。C区でも7世紀の遺構が集中する地区である。

平面形は楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸1.05mを測る。深さは斜面上側で0.3m、下側で0.2mである。壁面はやや上開きに急傾斜で立ち上がっている。壁面の一部に小さな段やくびれもあるが、ほぼ整った形状である。底部は多少の凹凸があり、斜面側に向かって緩やかに傾斜している。

埋土は3層に分層できた。いずれも水平を基調とした堆積状況である。1層はにぶい黄褐色粘土質シルト、2層は褐色シルトからなり、自然に埋没したとは考えにくい。3層は均一な土質でしまりがあり、人為的に埋め戻された土坑であろう。

埋土中から土器片が出土しており、細片のため図化できなかったが、古代の土器である。

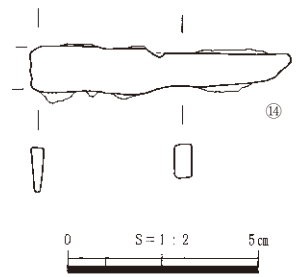
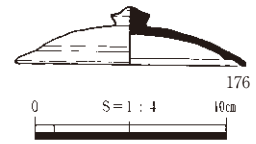
出土遺物や周辺の遺構から、飛鳥時代から奈良時代にかけての土坑と考えられる。性格は不明である。



第89図 SA 1

出土している。柱穴に納められた可能性がある。

出土遺物から、TK48併行期、飛鳥時代ごろの柵列と考えられる。重複するSS14とは主軸が異なり、出土遺物も新相であることから、SS14より新しい遺構と判断される。



第90図 SA1出土遺物

4 溝

SX2 (第91・92図、PL.23・24)

C区中央のD・E・F・G12グリッドにあり、標高49.9~51.1mの急斜面部に立地する。標高約50m付近の等高線に沿ってほぼ南北方向に延びる。北側はSS7・8の埋土を掘り込み、南側のG12グリッド付近では、SX1がSX2の埋土上に形成されていることが判明した。

平面は直線状を呈し、長さ33m以上、検出面で幅0.7~1.3m、底面で幅0.3~0.45mを測る。急斜面部を深さ0.25~0.8mに亘って断面逆台形状

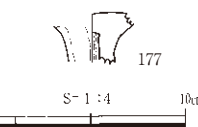
に掘り込むもので、底面は平坦で、ごく緩やかに南から北側へ傾斜している。南端部底面の標高は50.0m、北端部底面の標高は49.9mである。中央付近のF12グリッドでは、山側の壁面が幅20~30cmの波状に掘り込まれる部分があり、掘削の単位又は工具痕を示していると思われる。

埋土は、2~3層に分層できた。中央から南側は灰黄褐色土系の埋土であるが、北側はSS7・8の最上層の腐食土層を掘り込んだ関係か黒褐色土系の埋土となる。流水の痕跡は認められない。

遺物は中央付近のF12グリッドの埋土中から、わずかに土師器高坏片177が出土した。脚部の破片で脚部は面取りが施される。

詳細な時期は不明であるが、177は奈良時代ごろのものと考えられる。また、切り合い関係から飛鳥時代のSS7・8が完全に埋没してから掘り込まれていることから、飛鳥時代以降の遺構と考えられる。

等高線に沿ってほぼ直線状に掘られ、底面がほぼ平坦となり流水の状況も見られないことなどから、道として機能した可能性があり、短期間に埋没したと考えられる。



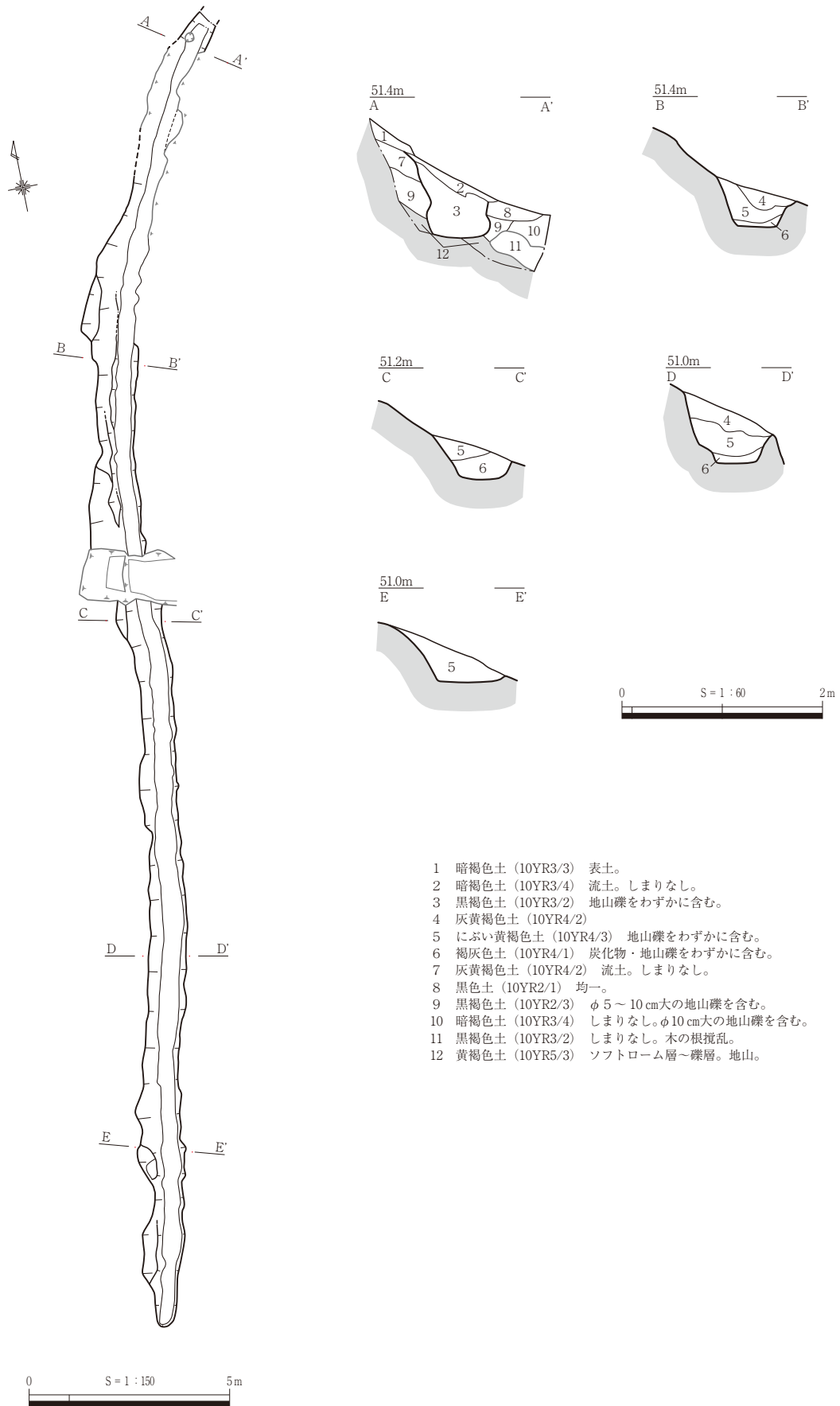
第91図 SX2

出土遺物



文中写真8 SX2作業風景

第3章 調査成果



第92図 SX2